

城之内遺跡 II

1991

岐 阜 県 教 育 委 員 会
財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

縁あふれる金華山。清澄な長良川。これら自然の恵みを受ける長良の地には、幅広い時代にわたる遺跡が数多く分布しています。これらは、美濃の自然・歴史・文化等々を知るうえで貴重な文化遺産であります。しかし、近年の開発事業の増加により、後世に伝えてゆくべき財産は消滅しつつあります。望ましい手段は現状のまま保護していくことですが、やむなく消滅していく遺跡に対しましては、その時に営み続けた先人の姿を知り、これを記録保存していくことが現代に生きる我々の義務であろうと思います。

城之内遺跡は縄文時代晚期から中世に及ぶ遺跡として、特に白鳳時代の長良廃寺跡や、室町時代土岐頼芸の居館とされる枝広館を通して知られるものであります。今回の発掘調査は、県立長良高校プールの建設に伴い、平成3年4月から8月にかけて、岐阜県教育委員会の委託のもと財団法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施しました。

発掘調査においては、寺の存在を示す遺構は検出されなかったものの、長良廃寺が存在した同じ時期と考えられる遺物が多く出土しました。この地には白鳳時代から奈良時代にかけて、何らかの公的な建物が存在したことがうかがわれます。また、本遺跡から出土した遺物が縄文時代晚期・弥生時代末期・古墳時代・奈良時代から中世と多岐にわたっていることから、この長良の地が古代より良好な生活の地であったことが分かり、美濃の歴史を語る上で貴重な成果が明らかになつたと思います。

発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成に当たりましては、関係諸機関・各位の暖かいご理解とご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。

また、現地における調査に際しましては、県民の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げる次第です。

平成4年3月

財団法人岐阜県文化財保護センター

理事長 岩崎忠夫

例　　言

1. 本書は、県立長良高等学校プール建設工事に伴う城之内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、岐阜県教育委員会の委託で財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 城之内遺跡は岐阜県岐阜市長良西後町に所在する。本遺跡の発掘調査は、平成3年4月1日から平成4年3月31日まで実施した。
4. 調査にあたっての組織は次の通りである。

理 事 長 秋 本 敏 文 (平成3年4月1日～平成3年10月15日)
　　・ 岩 嶠 忠 夫 (平成3年10月16日～平成4年3月31日)
副 理 事 長 篠 田 幸 雄
調 査 指 導 岐阜県教育委員会
指 導 調 査 員 八 賀 晋 (三重大学教授)
調 査 課 長 西 村 覚 良
調 査 係 長 只 腰 正 知
調 査 担 当 者 各 務 光 洋
事 務 局 長 岩 砂 仁
事 務 局 小 林 哲 夫

5. 遺物の整理・報告書作成にあたっては、上記の調査担当者のはか下記のセンター職員に協力を頼った。
- 宇野 治幸 武藤 貞昭 川部 誠 上嶋 善治 佐野 康雄 鈴木 昇
6. 報告書の執筆は各務光洋が担当した。
7. 遺物に付した番号は通番で、本文・遺物実測図・写真図版とも同一番号を付している。
8. 本発掘調査にあたって、岐阜県・岐阜県教育委員会・岐阜市・岐阜教育事務所には、多大な協力を得た。また、下記の県内外の研究者諸氏には、調査及び報告書執筆にあたって、ご指導・ご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。
- 大參 義一 (愛知学院大学教授) 大熊 厚志 (岐阜県教育委員会)
藤澤 良祐 (瀬戸市教育委員会) 高木 洋・内堀 信雄 (岐阜市教育委員会)
9. 発掘調査参加者及び整理作業参加者 (順不同)

福田 基二・臼井 那弘・田保 国男・鷺見 善治・安田 忠夫・中寫 清司・
加藤 幸夫・竹中 算夫・馬田 喜義・深見 茂男・山田 定一・藤吉 清・
松原 保一・市林 栄吉・桂川 弘・玉木 勝・河合 茂・足立 稔・
高畠 桂子・脇野 伸子・駒田 香絵・中村とよみ・水谷八重子・河本 節子・
松岡美代子・江間香代子・伊藤 節子・和田恵利子・酒向 邦子・山本 真理・
棚橋つや子・米津 美枝

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の概要	3
第1節 発掘調査に至る経過	3
第2節 発掘調査の経過	3
第3節 基本的層序	4
第3章 遺構	6
第1節 遺構の分布	6
第2節 遺構	6
1 溝	6
2 土 壤	7
3 井 戸	8
第4章 遺物	13
第1節 瓦類	13
第2節 繩文時代の遺物	14
第3節 土師器	14
第4節 須恵器	16
第5節 白 壺	20
第6節 白壺系陶器	21
第7節 寄窯製品	23
第8節 大窯製品	23
第9節 中國陶磁	24
第10節 常滑系製品	24
第11節 土師質土器	24
第12節 土 緊	25
第13節 その他の出土遺物	25
第5章 結語	39
図版	49

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	周辺の遺跡分布図	2
第3図	調査区域図	5
第4図	遺構分布図	9
第5図	土壤実測図	11
第6図	井戸・溝実測図	12
第7図	出土遺物(1)	26
第8図	出土遺物(2)	27
第9図	出土遺物(3)	28
第10図	出土遺物(4)	29
第11図	出土遺物(5)	30
第12図	出土遺物(6)	31
第13図	出土遺物(7)	32
第14図	出土遺物(8)	33
第15図	出土遺物(9)	34
第16図	出土遺物00	35
第17図	出土遺物01	36
第18図	出土遺物02	37
第19図	出土遺物03	38

写 真 図 版 目 次

図版1～2	遺構	49
図版3～9	遺物	51

第1章 遺跡の位置と環境

岐阜市は濃尾平野の北部に位置し、美濃山地を貫流した長良川の中流域にあたる。この長良川は岐阜市街地を二分するように北東から南西に流れ徐々に川幅を広げ、発達した扇状地を形成する。今回発掘調査を行なった城之内遺跡は岐阜市长良西後町に所在し、長良川の右岸、扇状地様の地形の扇頂付近に位置する。ここはかつて岐阜大学長良キャンパスの教養棟があった場所である。

城之内遺跡を中心とした半径 1 km に収まる範囲には、長良小学校遺跡・太田遺跡・天神遺跡・西野々遺跡など弥生時代の遺跡が多く、岐阜市における弥生時代遺跡の中心地になっていると思われる。さらにその周囲を囲む雄鷹丘陵、百々ヶ峰、城ヶ峰山麓一帯には、三角縁神獣鏡を出土した龍門寺古墳（龍門寺1号墳）や鉄剣・鉄製素鎧頭太刀・斧頭を出土した鶯山古墳（鶯山1号墳）など数多くの古墳群が築かれている。これら古墳群の被葬者の支配領域となつた地域に城之内遺跡は含まれると思われる。そして先に述べた扇状地を形成した低地付近一帯は生産基盤として成り立っていたと考えられる。

次に歴史時代に入ると白鳳期（7世紀中頃）の寺院として知られる長良庵寺が挙げられる。これは本調査地点の南付近において銅鏡大小2個をはじめ、軒瓦・平瓦などが採集されたことから命名されたものである。同じく、調査地点の北西部において昭和61年に岐阜市教育委員会によって発掘調査が行なわれた際には複弁七弁鬼面文軒丸瓦（人面瓦）が出土している。

その他東山道に関しては、長良周辺を当時の官道が通過していたと考える説があり、また、中世末には美濃国守護士岐頼芸が居をかまえたとされる枝広館があったという伝承が残る。



第1図 遺跡位置図

第2回 図2の流域分布図



第2章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経過

今回この地が発掘調査の対象となった直接的な契機は、岐阜県立長良高等学校の新プール建設にある。岐阜市長良地区にあった岐阜大学教育学部・教養部の黒野への統合移転に伴い、その跡地の利用計画が進められていたが、長良高校新プール建設は校地拡張・施設設計画の一部である。

岐阜大学跡地の利用計画を契機として発掘調査が実施されたものは過去に2件ある。その一つが昭和63年度から平成元年度にかけて行われた長良高校体育館建設に伴う発掘調査である。岐阜県教育委員会によって行われたこの調査では、弥生時代末期から古墳時代にかけての住居跡・大溝・中世の溝・井戸等の遺構、美濃国刻印入りの須恵器をはじめとする遺物が大量に出土している。もう一つは昭和61年度に岐阜市教育委員会により実施された、東長良中学校の建設に伴う発掘調査である。この調査でも弥生から中世にかけての遺物が大量に出土している。特に鬼面文付きの軒丸瓦や、その他の軒丸瓦や軒平瓦が数多く出土したことは、大学跡地に寺院跡または寺院に伴う何らかの施設が存在することを示唆している。

城之内遺跡はこのように旧岐阜大学の敷地がほぼ遺跡の範囲と思われ、プール建設予定地においても何らかの遺構が包蔵されている可能性があり、岐阜県教育委員会学校施設課と文化課による協議が行われ、その委託のもと財団法人岐阜県文化財保護センターによる発掘調査が平成3年度より実施されることとなった。

第2節 発掘調査の経過

現地での発掘調査は平成3年4月22日に開始し、同年7月31日に修了した。調査対象となった場所は中部未来博開催時に駐車場として供用されていたため、まず駐車場造成時の仮舗装土を4月中旬に重機を導入して除去した。そして対象となったプール建設予定地をおおうようにグリッドをめぐらした。グリッドは磁北を基準として8m四方とし、南北ラインは1~4、東西ラインは西からA~Eの名称を付してグリッドナンバーとした。なお、畔幅は1m、排土は東側のプール建設予定地区域外に置くことにした。

調査は土層の状況や排土等を考慮し西側からグリッドごとに掘り下げることにした。地表面下30~50cmより遺物は出土し始めたが、遺構を確認する面はさらに下部にあると判断し、土層観察用の畔を見ながら注意深く掘り下げていった。地表下70~100cmになると岐阜大学教養棟3号館の基礎があり、コンクリート塊を重機や人力で除去することに苦労し、調査は難航

した。

以後は遺構の検出に努めた。まず始めに確認した遺構は、調査区中央よりやや東側にあらわれた中世の溝である。この溝は茶褐色土（II層）において確認でき、途中、岐阜大学教養棟の基礎によって切られているものの、おおむね北から南に走っていることが判明した。この溝と同様のレベルで他の遺構の検出を試みたが、茶褐色土において検出できるものはこれと二・三のピットのみであった。そしてB3区～F3区の南側、及びC1区～C4区の東側に幅2mのトレーナーを十字に設定したところ、多くの遺構はさらに下層の暗茶褐色土（III層）又は黒色土（IV層）上面において確認することができた。

遺物の出土状況は表土（仮舗装土）を除いた下の茶褐色土（II層）から出土し始め暗茶褐色土（III層）までまんべんなくあらわれるといった状況であった。たとえば古式土師器と須恵器が同一レベルで出土するというように、層位的な上下関係で時期差をとらえることはできなかった。また遺構に伴うと考えられるものはほとんどなく、遺物の分布から遺跡の構造を把握することが難点であった。これらは中世後半か近現代において人為的に原位置から動いたか再投棄であったと考える。

城之内遺跡の調査は遺構確認面まで予想外に深かったり、梅雨による排水に調査の制約を受けたりしたが、平成3年7月31日に調査納め式及び現地説明会をもって終了した。

第3節 基本的層序

本調査区はかつて中部未来博の駐車場として使用されていたため、現況は平坦で、レベル差はほとんどみられなかった。これは第2節でのべたように重機等によって地形が均されたことにもよると思われる。表土（I層）の厚さは北側と南側で若干の差がみられるものの茶褐色土（II層）以下はコンクリート塊が存在する地点以外安定した状況で堆積していた。

当遺跡における基本的層序は以下の通りである。

第I層 (表 土)

未来博駐車場の造成土である。この造成土は砂と小石からなり硬くなっている。厚さは30cm程度で調査区南側へ向かう程厚くなり50cmを計る。また地形の改修であろうか、部分的に1m程の厚さでこの土が混入しているところもみられた。遺物は小量であるが須恵器片、瓦片が出士している。

第II層 (茶褐色土)

この茶褐色土は調査区全体に広く厚く堆積しているものである。その厚さは約1mであり部分的に小石が混入する。この土層はかつて畠地の耕作土であったと考えられる。上部のしまり

は弱く砂質である。下部は硬くしまっており、上部に比べ粘性が強い。中間より下へ行くと炭化物が点状に散っているところもみられた。このⅢ層は本遺跡の遺物包含層とでもいえる層であり、土師器・須恵器・山茶碗（白瓷系陶器）・土師質土器が量的に多く出土している。

第Ⅲ層（暗茶褐色土）

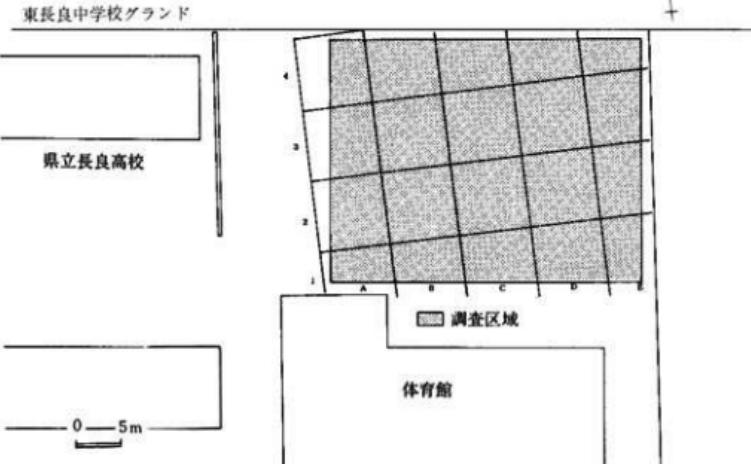
Ⅱ層よりも粘性が強く軟質の層位である。粒子のあり方からみるとほとんどⅡ層と変化はないが視覚的に分層したものがこのⅢ層である。厚さは約40cmを計るが調査地点によってⅡ層から下のⅣ層に直接移行している箇所もある。溝・ピット群がこの層から掘り込まれていることからおおむねここに生活面が想定できる。

第Ⅳ層（黒色土）

調査区全体に安定して広く堆積している。色調はまさに墨のような黒さで、黑色土というより漆黒土といった方がよいかもしれない。土質は軟質で粘性はきわめて強く、50cm程の厚さがある。この層の上面からは縄文晩期の浅鉢が出土している。しかし層の内部からは遺物の出土はみられなかった。

第Ⅴ層（黄褐色土）

黒色土から徐々にこの黄褐色土に移行していく。吸水性のない粘質土である。遺物の出土はまったくみられなかった。



第3図 調査区域図

第3章 遺構

第1節 遺構の分布

検出された遺構は溝2条・土壙4基・井戸2基・柱穴様のピット群である。ほとんどの遺構は黒色土(IV層)上面において確認されたが、実際に掘り込まれていた層位はグリッドごとに設けた土層観察用の畔をもとにするとⅡ層下部やⅢ層であると思われる。

溝2条は調査区の東側に走っている。この2条はあたかも平行しているかのようであり、地割りのうえでなんらかの規制を受けて存在していると考えられる。土壙は調査区の北側にまとまって分布している。井戸は南西部に約6mの間隔をおいて位置している。ピット群は調査区の西側に広がっている。それぞれの遺構があるまどまりをもって分布していることから城之内遺跡の構造を解明する糸口になりうると思うが、より広い面積で論じられることであろう。これらの遺構は出土遺物から中世に属するものと考えられる。

第2節 遺構

S D 1

D1区からD4区をほぼ南北に縱断する溝である。ただし途中3箇所を後世の攪乱によって分断されている。幅は0.5m~0.9m、深さは確認面(Ⅲ層)から計ると0.3m~0.4mであるが、調査区域北側の壁を観察すると、本来の掘り込みはⅡ層中からであり、深さは0.8mはあったと思われる。掘り方の断面形は矢研掘りで、埋土は4層に分層される。堆積した土から判断すると砂質の黄茶褐色土が一気に流れこんだ様子が伺われる。その埋土からは、周辺の遺物包含層と同様に古墳時代前期の土師器から須恵器・山茶碗・窯窓の終末期の縁釉皿・天目茶碗などが出土した。これらはいずれも細片である。

出土遺物から判断して15世紀の所産と考えられる。

S D 2

D1区からD3区・E4区にかけて検出された南北方向の溝である。SD1とはほぼ平行しているが、主軸は真北からやや東へ振れる。途中後世の攪乱により3箇所を切られているものの、本来は連続していたものと推測する。幅は1.2m~1.4m、深さは0.3m~0.7mを計る。掘り方は箱掘りで、層位をつぶさに観察するとⅡ層下部から掘り込んでいることが分かる。埋土は複雑に分層され、底部の構造が段差をもつていてことから当初使用していた溝が廃絶等の理由である程度埋没した後、再度掘り返され、2次使用されていた可能性もある。埋土の最下層から

出土した山茶碗から判断すると、13世紀の所産と考えられるこれらの溝は地割りの溝の可能性が考えられるが、周辺に明確な建物跡が存在しないため推測の域を出ない。なお、E 4区において深さ約0.5mを計る溝と直交している。搅乱によってその大半が不明である。

S K 1

D 4区において検出された。形状は長方形を呈し、短径は120cmを計る。一部調査区域外に出ており長径は不明であるが、現状では90cmを計る。Ⅲ層上面において確認され、非常に浅い掘り込みで、深さは10cm程度である。埋土はSD 1の堆積土によく似ており、砂質の黄茶褐色の1層であった。出土した遺物は山茶椀・白壺・白鳳期と思われる平瓦片などが小量あった。

S K 2

C 4区の北西コーナーより検出されたものである。形状は角のとれた長方形を呈す。長径は100cm、短径は60cmを計る。確認面からの深さは約10cmである。底面には6個の河原石を敷きつめ、埋土には細片の土師器・須恵器・灰釉陶器が混入していた。河原石は若干赤火しており、それらの石は土壤の底部の広がりに合わせるかの様に配されている。土壤の壁については浅いこともあり焼けた跡は確認されなかった。埋土は(IV層)黒色土と(III層)暗茶褐色土の混入土であった。

S K 3

C 4区の中央にて検出された。形状はSK 2とはほぼ同一で、長径は110cm、短径は65cmを計る。土壤の側面の土はごく一部赤く焼け、周辺の壁に比べ剥落が激しかった。底部には河原石が7個敷かれており、これも若干赤火している部分が確認された。埋土は黒色土と暗茶褐色土の混入土で、深さは確認面より26cmを計る。検出された遺物は山茶椀・土師器・須恵器・土師質土器の小破片である。

S K 4

C 3区の北側にて検出された。埋土からは炭化物のはか山茶椀・須恵器・土師器の細片が検出された。形状はSK 2とはほぼ同一であり、長径は120cm、短径は70cmを計る。底部には8個の河原石が敷かれており、深さは約30cmを計る。

SK 2からSK 4は形状・底部の河原石等の状況がよく似ており、同一の性格を持つと思われる。他の類例から中世の土壤墓と考えられる。

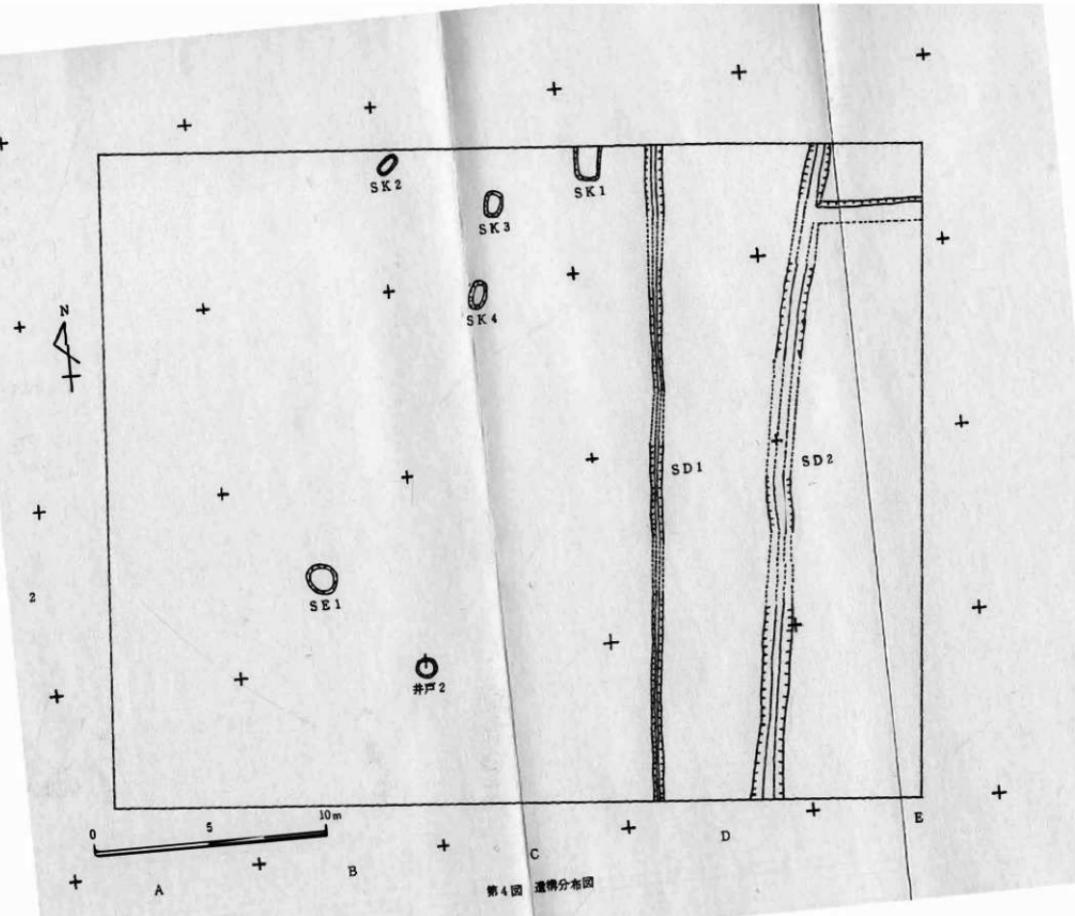
S E 1

B 2区の中央にて検出された円形プランの井戸である。径は1.3mを計る。検出面より1.8mまで掘り下げたが、素掘りの井戸のため壁の崩落の危険性があり、それ以上掘り下げるは断念した。その後重機で半分に断ち割り、下部の構造を調査した。その結果水溜部分には灰白色の粘土を巡らせていることが判明した。また深さは3.8mを計った。埋土からは後の流れ込みと思われる河原石や拳大の礫が確認面より0.8mにて検出されたほか須恵器の壺の細片・山茶椀・常滑焼の壺・大窯期の擂鉢が出土した。

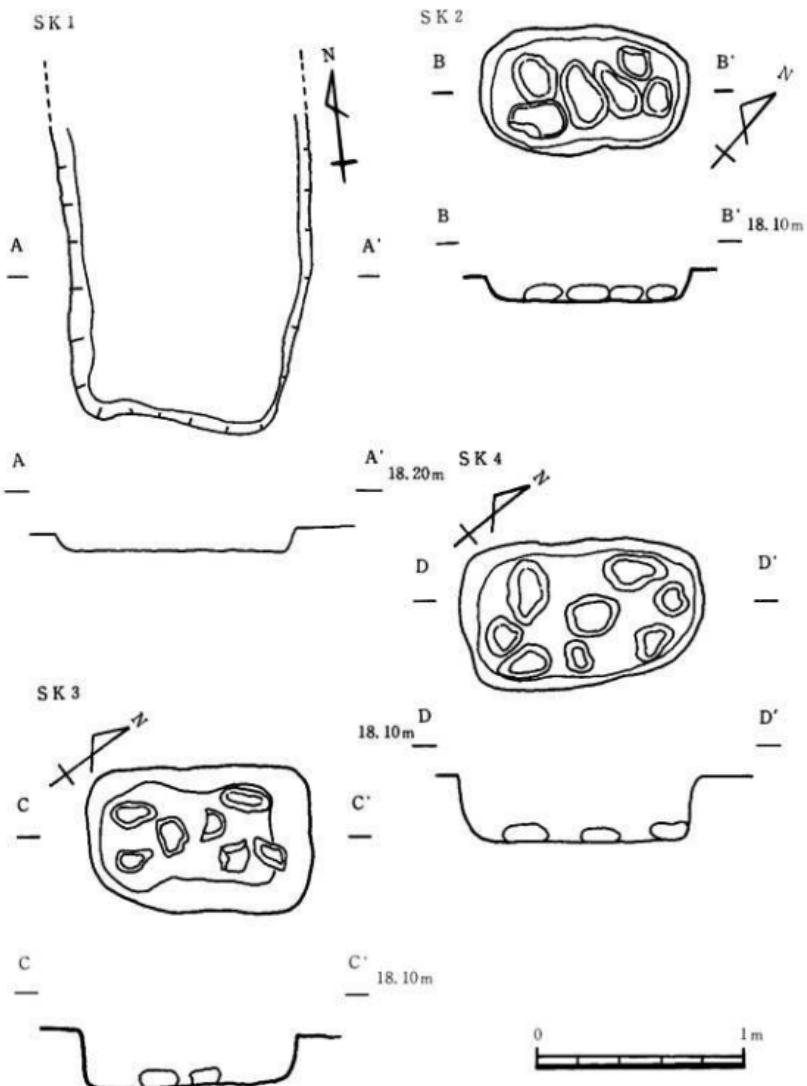
時期等不明な点が多い。

S E 2

B 1区の北東隅にて検出された円形プランの井戸である。径は0.8mを計る。1.4mまで人力で掘り下げたのち、重機で断ち割った。底部はとくに構造物はなく、予想外に浅く確認面より深さは2m止まりであった。埋土からの出土遺物は見られなかつたが、0.7mの深さから河原石が折り重なるように検出された。これは壁の保護のために巡らされた石が崩落したものと考えられる。

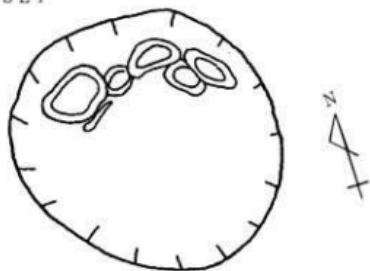


第4図 遺構分布図

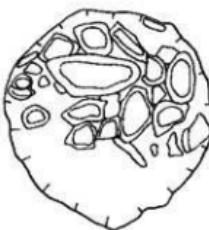


第5図 土壌実測図

S E 1

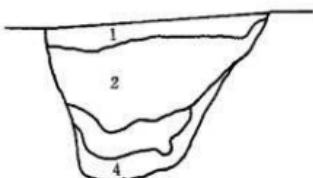


S E 2



S D 1 埋土断面図北端

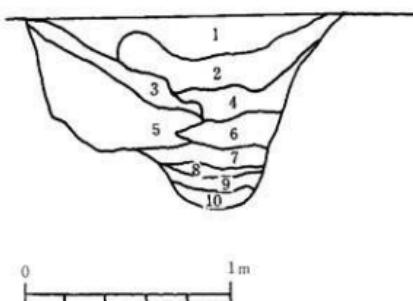
18.70m



1. 茶褐色土層 粘性小
2. 黄茶褐色土層 粘性小
3. 黄茶色土層 粘性大
4. 茶褐色土層 粘性大

S D 2 埋土断面図北端

18.50m



1. 茶褐色土層
2. 黄茶色土層
3. 黄茶色土層
4. 暗茶褐色土層
5. 茶褐色土層
6. 暗茶褐色土層
7. 明茶褐色土層
8. 茶褐色土層
9. 茶褐色土層
10. 灰茶褐色土層

0

1m

第6図 井戸・溝実測図

第4章 遺物

第1節 瓦類 (第7・8・9図 1~13)

平瓦・丸瓦合わせて48点の出土があった。昭和61年度の岐阜市教育委員会による発掘調査においては2万点を超える出土量があったが、これに比べると約100m東に位置する当調査区の出土量は極端に少ないと見える。出土地点の分布でみると、調査区の西側に比較的多く出土したといえるが、特に集中した箇所はない。器種において確認したものは平瓦・丸瓦のみで、軒丸・軒平瓦・道具瓦の検出はなかった。多くは表面が磨滅した細片であるため、実測可能な13点について図示をした。

1. 平瓦 (1~9)

今回出土した平瓦の凸面には、放射状・斜格子・格子の3種の叩き痕が認められた。一部には斜格子と格子が重複して叩かれたものもある。縄目叩きや凸面に布目痕が見られるものは確認しえなかつた。1の凸面は放射状の原体によって叩かれており、凹面には布目痕が明瞭に残る。この瓦は側部と前端部が残るもので、側面形態として前端部に向かうに従い先細りしていくことが特徴である。2は斜格子の原体により連続して2度、3度叩きが施されたもので、凹面には布目痕、模骨痕、布の合わせ目痕が見られる。前端部は面どりされている。1と同じで、側面形態は端部に向かうにつれ先細りしていくが、これは凹面が端部に向かい傾斜をもってヘラで削り取られるためである。3の器壁は他と比べて薄い部類である。焼成は堅緻で砂粒は少ない。凸面には斜格子の叩き痕に一部小さい格子の叩き痕が混じる。凹面には布目痕が明瞭に看取でき、ヘラ状の工具で二次調整されている箇所もある。4は凸面に斜格子の叩き痕が見られる。まず細かい格子目の叩きが施されたあとに、粗い斜格子によって再び叩かれている。凹面に布目痕が見られ、一部磨滅している。また断面から成形途中の粘土板の合わせ目が確認できる。5は灰白色を呈し、凸面に斜格子の叩き痕、凹面には布目痕が見られ、一部なで消されている。6は最も焼成の良好なもので胎土は緻密で側面が残る。凸面に斜格子の叩き、凹面に布目痕と布の合わせ目が認められ、ハケ状の工具で再調整が施されている。なお側面と凹面の接する面にもヘラ削り調整が施される。7は斜格子の原体が凸部に施され、側部にはヘラ削りが見られる。8は側部と凸部が接する部位にヘラ削り調整が施され、統いて側部にもヘラ削りが行なわれている。凸部は格子目の原体による叩きのうえに大き目のやや粗い斜格子の叩きが施される。凹部には布目痕と布の合わせ目痕がみられる。また粘土板の接着も断面を通して確認できる。9の側部はヘラ削りがなされ、凸部には格子目の叩き痕が施されている。生焼け状態で砂粒は並である。

各資料の凹面に粘土板の重ね目や布の合わせ目、桶の模骨痕がみられるものがあり、桶巻きづくりによって製作されたものと考えられる。

2. 丸瓦 (10~13)

7点の丸瓦を確認した。灰褐色を呈すものは焼成が堅密で胎土も緻密である。他は風化のためか、表面が白く粉状になっているものがあるなど色調は多彩である。図示したものは4点である。10の色調は白色を呈し焼きが弱い。凸面は丁寧になでられ、叩きの痕跡は見られない。側面と前端部はヘラ削りがなされる。凹面には布目痕が明瞭に見られ、植物茎のあとが一部確認できる。11の焼成は堅密で色調は灰褐色を呈す。凸面にはヘラ状工具によるなでが施され、凹面には布目痕と合わせ目痕が見られる。12は側部・端部が残っており、凸面・凹面ともナデ調整が施されている。焼成は軟質で砂粒は少ない。13は側部・端部とともに良好な状態で残っており、ともにヘラ削りが施される。また凹部と側部の接する位置にもヘラ削りがなされる。

第2節 繩文時代の遺物 (第10図 14~19)

1. 繩文晚期土器 (14~16)

14は縄文晚期後半、樺式に比定しうる浅鉢である。Ⅲ層暗茶褐色土の下位において検出されたもので、口頭部に2条の凸帯がめぐり、口縁端部には突起が16箇所配される。内外面ともにヘラ磨きが見られ、雲母粒子を多く含む茶褐色を呈す。15は壺の口縁部で、端部からやや離れてO字状の押し引きのある凸帯が付く。押し引きは貝殻で施され、凸帯の下にも貝殻によるナデ調整が行なわれている。これは晚期後半の五貫森式に比定しうる。16は浅鉢の口縁付近の細片で横位に沈線が4本めぐり、上段と中段において波状に隆帯が流れる。沈線の下はヘラ調整によるミガキが見られる。

2. 石器 (17~19)

17・18は敲石である。素材となった礫の端部には敲打によって生じた潰れを持つ。石質はともに砂岩である。17は特に大型の部類に属する。19は撥形を呈す打製石斧である。自然面が一部残り、刃部は使用による磨耗のためか滑らかである。石質はホルンフェルスである。

第3節 土師器 (第10・11・12図 20~59)

1. 高坏 (20~26)

20の坏部は口縁に向かいゆるやかに立ち上がり、端部は内反気味に丸く収められる。脚部は坏部に比して小さく短い。胎土は淡黄灰白色で1mm~3mmの砂粒を多く含む。21・22は坏部のみの遺存である。ともに丹影が器壁に残り、腰部において棱を持ち緩やかに開いていくものである。内・外面は入念なヘラ磨きによって仕上げられており、ここには茎状压痕が認められる。23~26は脚部のみの遺存である。23は円形の透孔が穿たれて、外面にはヘラ磨きが施され

ている。これは器台の可能性も考えられる。24・25は裾部に向うにつれ強く外反し、透孔は無いものである。24の裾端部は下方に向って突き出しているが、25は外反したまま丸く収束する。26の器形は、21・22と同様のタイプと思われる。

2. 器 台 (27~28)

27の器中央は貫通し、脚部には円形の透孔が4箇所に穿たれている。この透孔は相対する2組が同じ高さになるように施され、外面は丹念なナデによって仕上げられている。28は坏部との接合部より輻方向のヘラ磨きが施され、中位より裾部にかけては斜方向のミガキが認められる。内面にはクシ削りが施され、胎土は密で砂粒が少なく、丁寧な作りである。透孔は横に2個一組のものが相対した計4箇所に穿たれている。

3. ミニチュア土器 (29)

指頭の押圧により粘土を引き出す手づくねによる製品で、いわゆる小形祭祀壺の一種である。口径3.8cmを計り、外面にナデ調整が施され淡赤色を呈す。

4. 小形丸底壺 (30~32)

計6個の小形丸底壺を検出した。図示した3点はいずれも手づくねの製品である。30は最大径を胴部中位に持つもので、底部が他に比して厚い。31・32は外面にナデ調整が施され口縁部に横位のナデ調整の痕跡が認められる。31は胴部上半に最大径を持ち、強くくびれた後に口縁に向かうやかに開くものである。32は最大径を胴部中位に持ち、くの字状に頸部でくびれたのちに口縁に向い開くものである。

5. 壺 (33~38・58)

32を大形にしたようなものが33である。底部からゆるやかに立ち上がり、胴部中央に最大径を計る。頸部は強く屈曲し、再び口縁に向い、やや内湾気味に開く。口縁端部は丸く收められ、器壁はナデによる丹念な仕上げにより非常に滑らかである。内面には指頭によるナデとヘラ状工具によるナデが認められる。34から38はいわゆるパレススタイル壺と称されるもので、34・35・36は広口壺形土器の口縁部である。34は折り返し口縁の外面に6条の細い沈線をめぐらし3本の棒状浮文を付したものである。内面はナデ調整が認められるのみで素文である。35は折り返し口縁の外面に3本の沈線をめぐらしたもので、口縁端部は上方につまみ上げられている。内面には羽状文がめぐる。36は口縁の折り返しが明瞭で、端部は下方に引き出され、5条の沈線と継位に4本の棒状浮文が貼付されている。内面には上下2段に羽状文がめぐる。37は口縁を内反させたもので、内面に羽状の刺突文が見られる。38は壺の肩部破片で、斜状の刺突文の下に沈線が施され、この下に列点文がめぐっているものである。赤彩はこの列点文の下に施されている。58は胴部中央に張りを持ち、口辺部において内湾し端部にいたる。口縁部から頸部にかけてヘラ磨きによる整形痕がみられ、胴部はナデ調整が施される。底部を欠損するが丸底を呈するものと考えられる。

6. 甕 (39)

39は淡黄灰白色を呈す甕である。胴部の下半部を欠損している。器厚は5mm程度のところもありたいへん薄手である。外面は細かな縦位のハケメが2段にわたり施され、内面は粗いハケメが横位から斜位に施される。口縁は内反し、端部は尖る形状をなす。その他、蛇頭形の把手が10点ほど出土しているが、これらは甕に該当すると思われる。この中にはハケメが施されているものが1点あり、他はナデ調整である。

7. S字状口縁台付甕 (40~48・57)

独特な有段口縁を持ち、2次的なハケメが外面調整として施されるものである。胴部に向うにつれ器厚が非常に薄手の作りとなるため遺存状態が悪く、図示したものは10点にとどめた。

外面調整でみると、体部上半外面に横ハケが認められるもの(40・41・44・46)と横ハケが省略化されたもの(42・43・45・47)の2種類がある。42は口縁部上段が最も外反の強いもので、今回出土したタイプの中では少ない部類に属する。反対に44の口縁上段は直口気味のものである。色調は褐色を呈するものが多く、胎土は砂粒が目立つ。48はS字甕の中では厚手のもので、胴部上半に最大径を持つ。これは小形でいびつな造りで非日常的な道具として使用された感がある。調整は肩部から体部にかけて横方向のクシメが施され、体部下半に縦位のクシメが認められる。57もS字甕の中では厚手でクシメは刻み込むかのように施されている。口縁端部の屈曲は見られず単純化したいわゆる宇田型台付甕である。最大径を体部上半に持ちクシメを頸部から肩部と肩部から体部下半の2段階にわたり施している。欠損した台部との接する箇所において粘土紐の接合がよく分かる資料である。

8. 甕 (49~56・59)

古墳時代後期から奈良時代初頭にかけての甕が主体である。54のように広口で胴が短いもの、59のように胴張りの甕のほかは長胴の甕が圧倒的に多い。49は胴部上半の張りが弱く口縁部の屈曲も小さい。口縁端部をシャープに上につまみ上げておらず、外面が縦位、内面は横位のハケメで整形されている。55とともに胴部がかなり薄手となっている。50は口縁端部のつまみ上げにシャープさが無くなっている。51の口縁部の開きは直口気味で外反しない。口縁部と肩部に煤が付着している。52は肩部において斜めまたは横方向のハケメが施され、くの字状に屈曲したあと口縁に向って開いている。53~56には胴部内面に指頭圧痕が認められその後ナデが施されている。56の口縁部は端部において下方向に若干引き出されている。55は50・53と同様に口縁の立ち上がりが短いものになっている。59は口縁上端から胴部下半にかけて縦方向の粗いハケメが施されている。また内面にはヘラ削りが見られる。

第4節 須 惠 器 (第14・15図 60~104)

胎土の色調や焼成等の特徴から、本遺跡の須恵器のほとんどは稻田山古窯跡群、老洞古窯跡

群をはじめとする美濃須衛古窯跡群を供給地として考えられる。美濃須衛古窯跡群の編年によればIV期、実年代では8世紀のものが主体をしめる。IV期の設定基準は「かえりを有する坏蓋の消滅が第Iにあげられる」わけであり、出土した坏蓋の観察によると、内面にかえりの無いものがほとんどをしめ、かえりを有するものは細片にして少なく、わずか15点程の確認にとどまる。出土した器種を挙げると壺、壺、鉢、坏、高坏、蓋、塊、盤、皿であり、その他、瓶類として横堀・平瓶、壺類に應である。

1. 坏 蓋 (60~64・70~74)

60は外面体部中央に稜を持ち、調整は横ナデが施されている。胎土・色調は他の須恵器と異質で、和泉陶邑窯からの搬入品と考えられる。61の頂部にはヘラ削り調整が施され、内外面の体部には横ナデ調整が見られる。62・63は頂部にヘラおこしの痕がみられ、色調は灰色を呈す。64は内面頂部に同心円状の當て具痕、外面頂部には叩き痕があり、本遺跡出土の壺の内外面にみられるものと同様の調整が施されている。外面においてはその後横ナデ調整が施されるが、この整形方法は特異なものである。叩きが施された頂部は薄く仕上がっているが、体部の器壁は波を打っているかのように不整を呈す。70から74はつまみを持つ蓋で、これらは扁平な擬宝珠状のもので、特に73は扁平の度合いが強く、規模も大きい。口縁部には下に向かって折り返すもので、ここにシャープさは見られない。74のつまみは扁平ではなく、整形も良好である。7世紀後半に比定されると思われるが、坏身の場合と同様に法量が小型化する。内外面に横ナデが施され部分的に自然軸を受ける。70・71の外面はヘラ削り後、横ナデが施され灰白色を呈す。72・73はつまみの周辺のみヘラ削りを行い、平坦な箇所が広くなっている。それ以下は横ナデを施す。内面はどれも横ナデである。

2. 坏 身 (65~69・75~80)

65から69は口縁部の立ち上がりが短く鋭さが無いものが多い。また浅身で底部内面にヘラおこしの痕が見られる。69は底部に平坦な面が見られない。68は外面に丹念なヘラ磨きが施されたものである。75から80は有台坏身と無台坏身である。器高は3.6cm~5.1cmを計り、比較的浅い高台から直線的に立ち上がるものが多い中で、75の体部は丸みをもって口縁にいたる。底部は高台と同じ位置まで下がっている。体部の内外面は横ナデが施され、中心部にはナデ痕が見られる。また高台接着痕が看取され、底裏はヘラ削り調整である。76とともに内面に灰軸が斑点状に付着している。77・78は無台坏身である。内外面ともに横ナデ調整を施し底部は平坦である。80は底裏に墨書で「真」の字が書かれている。胎土は緑灰色を呈し、高台は非常にシャープな作りである。

3. 高 坏 (81~84)

脚高の高いものと低いものがあり多様である。図示したものは4点で、81は坏部と脚部の遺存状態の良いものである。この坏部は底部より緩やかに立ち上がり、口縁部が外反気味に開く。

口縁端部は丸く收められ、全面ナデ調整によって仕上げられている。脚部の広がりは坏部の口径に比べ小さい感があり、裾端部は鋭く下方へ突き出す。82は小振りな高坏である。裾部は大きく開き、端部は下方に折り返している。脚外面はナデ調整が施される。83は太めの脚上部から徐々に開いていき下部にて強く横に開く。中位には三方の透孔が配される。84も脚部のみであるが、中位に2本一組の沈線をめぐらせ段を作り出している。裾端部は屈曲する。

4. 縫 (85)

注口部を欠いているが縫と考えられる。なだらかな肩部を持ち、胴部上半には自然軸を受ける。八の字状に開く高台はヘラ削り調整、胴部は横ナデで整形している。8世紀前半の新しいものである。

5. 平 瓶 (86)

胴部下半を欠損しているが、平瓶の唯一の例である。灰緑色を呈し、口頭部には沈線が一周する。ヘラ状工具の先端で沈線を設けたと考えられるが、意図的なものかどうかは不明である。頭部付近と胴部の境目あたりに粘土の円盤で孔をふさいだ跡がある。整形は全体に横ナデにより仕上げられている。

6. 皿 (87)

体部は斜め上方に強く開き、高台は断面台形を呈し内外面ともにヘラ削り調整を施す。口縁部は外反気味に開き、丸みをもって收められる。内面は部分的に自然軸を受けている。

7. 盤 (88)

88は、底部はやや丸みをおびて、体部内面は口辺部において段を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。高台は外開きで、中位において細く、凹面を形成している。調整は底裏に回転ヘラ削り、体部に横ナデが施される。その他、盤と確認した細片数は20点程である。88のように高台を有する器形と、台部を有する器形が見られる。後者には十文字の透孔が配されるものも出土した。

8. 壺 (89)

高台は短く角張ったものが垂直に付く。体部は丸みを持って大きく開き、内面底部中央はやや凹んでいる。口縁端部には面取り調整が施されるほか、まきあげ痕が内面体部に確認される。塊と認められるものは少なかった。

9. 蓋 (90)

天井部に外面が凹むつまみが付いたものである。いわゆる有蓋高坏の蓋で、6世紀代のものと思われる。青灰色を呈し、胎土は非常に緻密である。つまみの周りから体部中央にかけて回転ヘラ削り痕が残る。

10. 捕鉢 (91)

捕鉢が1点確認された。ただし底部のみの遺存で体部は不明である。底部は丸底状である。

この厚い器壁に内外面から刺突による穴が見られる。

11. 壺 (92~94・98~101・107・109~113)

須恵器の中ではこの壺の細片が最も多い量に出土したといえる。92は肩部より下位に叩き目痕、内面に当て具痕が認められる。肩部から頸部にかけて緩やかなラインを描き、口縁の手前にて稜を持つ。端部は面取りが施される。また外面全体に自然釉を受け、灰褐色を呈す。93は断面図のみであるが、把手付きの壺と思われる。頸部にはヘラ削りの後に横ナデが施され、胴部中央に角状の耳が貼付される。94は壺の口縁部の細片である。折り返し口縁をもち、口縁内面は横ナデ、肩部外面には叩き目痕が見られる。98は92とよく似た作りの壺である。肩部から緩やかに立ち上がり、いったん稜を作つてからほぼ垂直に口縁に達するものである。101は壺の胴部破片で外面に叩き目痕、内面に青海波文の当て具痕が見られる。ヘラ記号か文字の一部か不明であるが、「ヒ」と記されている。107は口縁部の細片で、青灰色を呈す。口縁の下端部は横方向に引き伸ばされる。口縁直下に沈線が巡りその下に継位の刺突文がほぼ等間隔で施される。110から113は叩き痕と当て具痕の中で代表的なものを示した。これらは内面に同心円状の当て具痕があるものと、渦巻文の当て具痕があるものの2種類に分けられる。110は同心円の中央に十文字の刻みがある当て具を使用したことが分かる唯一の例である。外面は格子ふう叩き目文が見られる。111の外面は右傾の平行叩き目文、内面には目の粗い同心円文が見られる。112・113の内面は渦巻き文で、113は扁平で目が粗い渦巻き文が見られる。外面は平行叩き目文の後にヘラ削りを施す。109は口縁部の細片で、口縁端部は面取り調整されその直下に凸帯が一巡する。

12. 横 壺 (97)

横壺の口縁部破片を1点確認した。濃灰色を呈し、口縁内面に点状に自然釉を受ける。壺と同じで外面に叩き目痕、内面に当て具痕が見られる。

13. 壺 (99・100・105・106・108)

99は胴部の張りを上位に持つもので、外面肩部においてヘラ削りの後に横ナデが見られる。また、口縁内面に沈線が一巡する。100は短頸壺である。内外面ともにヘラ削りによって調整され頸部から肩部にかけて自然釉を受ける。105は大型の壺の口縁部である。2本一組の沈線が2箇所に巡り、その沈線の上に櫛状工具による刺突文がくの字状に施される。それ以外は横ナデが施される。106はラッパ状に開口する壺類の口縁部と思われる。外面は横ナデ、内面は自然釉を受ける。108は長頸壺の細片で肩部から緩やかに立ち上がり、口縁の手前で段を作る。全体にヘラ削りを施し口縁端部は面取り調整が行なわれる。

14. 円 面 琥 (102)

脚台部が比較的短い円面圈足硯である。硯面部は使用によるためか擦痕がみられ、いくぶん中央に向かって凹んでいる。海と陸の境目に内堤は作り出されておらず。シンプルなものである。

る。透孔は方形で復元すると9つである。内外面ともにナデによる調整が施される。

15. 鉢

図示はしなかったが、最大径24cmを胴部上半に持つものが1点、底部の細片、胴部の細片を1点ずつ確認した。これは粘土紐巻き上げの痕跡が残り胴部外面はヘラ削りがなされる。

16. その他 (95・96・103・104)

95は8mmの幅で断面コの字状の凸帯が貼付されているもので、羽釜を想起させる。凸帯の下1cmにはあたかもりんごの皮むきを思わせるヘラ削りが認められる。破片から推定すると直径は12cmを計る。96は坏蓋の一部と思われ、内面にはヘラがきによる「伊」の文字が見られる。103、坏蓋の一部と思われるが、これは内面にあたるほうにヘラがきで「寺」の文字が書かれている。104は無台坏身の底部破片で底裏にあたる面にヘラがきで「本」と書かれている。

第5節 白 瓷（灰釉陶器）(第16図 114~120)

検出した器種は輪花碗、輪花皿、小碗、碗、段皿、瓶類などである。遺存状態は細片がほとんどで完形資料はない。また復元も困難で図示したものは半分以上残っていたものである。碗皿類の施釉はツケ掛けがほとんどである。碗の中には底裏にヘラ記号が認められるものもある。

1. 輪花皿 (114・115)

114の灰釉は内面に厚く塗られ外面は薄い。胎土は堅密で高台は断面三角形を呈す。115は体部外面に横ナデを施すが、高台の直上にはヘラ削りの痕跡と底裏に糸切り痕を確認することができる。また口縁端部を5mmの幅で折り返している。

2. 輪花碗 (116)

116の内面底部は非常によく磨耗している。灰釉は内外面ともに薄く、調整は皿類と同じく体部上半に横ナデ、体部下半にヘラ削りが施される。色調は淡黄灰白色、胎土は緻密である。

3. 小 碗 (117・118)

117は内面に灰釉が薄く塗られているが、外面には一部認められるのみである。高台外面に稜を持ち、体部との接合する箇所においてえぐるように内湾したあと、口縁に向い丸みを持つて開く。また口縁端部は指先で斜め上方に引き伸ばされている。118の遺存した中においては灰釉が塗られた痕は見られない。高台は断面三角形を呈すが、焼成不良のためか117より貧弱な感を受ける。内・外面に横ナデが見られる。

4. 碗 (119)

小破片ばかりで図示したものは119のみである。高台は先端に丸みがあり断面三角形の退化したものと思われる。腰部において張りを持ち、口縁部はわずかに外反する。ロクロ水挽き痕が明瞭に残り器壁にはぬた痕を有す。灰釉ラインは体部上半に見られるが、風化のためか薄いものとなっている。底裏には糸切り痕が残る。

5. 段 盆 (120)

口辺部の細片が多く、底部と判断されるものも不明で、図化したものは1点である。内面の段が明瞭に付けられている。他の器種に比べ灰釉は内外面に厚く塗られており光沢も残る。口径は20.4cmを計る。胎土は堅緻で灰白色を呈す。

6. 瓶 類

胴部の細片が10点。口縁部が1点。底部の細片が3点確認された。灰釉は厚く塗られ、内面には指頭圧痕の見られるものもある。底部の高台は碗・皿類に比べ小さいものとなっており、断面は四角形を呈す。

第6節 白瓷系陶器（山茶碗）(第16・17図 121~145)

調査区域において白瓷系陶器の出土量は須恵器につぐもので、完形資料をはじめ細片まで見ると荒肌手（南部系）の碗が多いことがいえる。器種は碗の他、小皿、大平鉢、片口鉢などで多くは回転糸切り痕がすり消されることなく明瞭に残っている。また高台端に輪状圧痕が残るものが多い。

1. 碗 (121~140)

121、高台脇から八の字状に開き口縁に達している。口縁端は丸く調整されており内面底部は重ね積み焼成に関係するか高台接着部が扁平になり、中央に指圧痕が認められる。付高台はナデ調整により接着されており底裏には回転糸切り痕が残る。122、付高台は接着面の広い断面三角形である。底部の器壁は厚く、高台脇から八の字状に開き口縁に達する。口縁部はやや外反し内面底部、底裏は扁平である。底裏には回転糸切り痕が認められる。123、腰部で少し張り口縁に達する。内面底部の中央に指圧痕がある。付高台は丁寧なナデ調整が施される。124は底部内面周辺に輪状のくぼみが見られ、口縁端部に面取りが施される。砂粒子を多く含みざらざらしている。125の高台は重量のためか低く潰れている。124と同様に口縁端部は面取りされている。126はさらに高台が貧弱なものになっている。外面中央部に押さえによるくびれが認められ、底部内面中央部に指圧痕がある。付高台は細いより土を貼付せず、調整で接着されている。口縁端部と胴部内面の一部に自然釉が見られる。127、底部は肥厚し、ナデ調整で接着された付高台はやや潰れた感じがする。口縁部は外反気味で胎土は灰色である。128、胎土に砂粒を含み暗灰色を呈す。高台脇から斜め真っすぐに開いていくが、外面口縁部にくびれがみられる。付高台は丁寧なナデ調整によって接着され糸切り痕もすり消されている。129、無高台である。風化作用により器壁表面はざらついており薄い作りである。皿状を呈すから碗としてよりも皿としての用途が考えられる。口縁端部は丸く調整されるほか、全体にはナデ調整が施される。130、口縁端部は面取りされており内面底部には輪状のくぼみが認められる。131は外観的には無高台碗と同じ器形を呈す。これは剥落した箇所が多いが薄い高台となって

いる。132から134は底裏の回転糸切り痕を示した。胴部下半になで調整が見られるほか、内面底部中央にはすり消し痕が認められる。133の付高台は重量のため平たく潰れている。断面は台形を呈し稜殻圧痕も多く見られる。また、内面はすり減っているために滑らかである。135から140は均質手（北部系）である。135は黄灰色を呈し無高台である。底裏には回転糸切り痕と板状圧痕が見られる。内外面にロクロメが目立つとともにぬた痕も多い。胴部は丸みをもって開き口縁端部に面取り調整が施される。136、小さな高台が付きここには稜殻圧痕が大量に見られる。体部のロクロ水挽き痕が明瞭である。137も136と同様にロクロ水挽き痕が見られる。無高台の碗で黄白色を呈す。138の付高台の断面形は三角形を呈す。底裏には回転糸切り痕がすり消されず部分的に残る。内面底部中央は凹み、体部のロクロ水挽き痕が明瞭である。また、口縁は玉縁状に膨らむことが特徴である。灰白色を呈すが、内面には自然釉が点状に付着している。139、内面底部には重ね焼きの痕が残り、輪状に凹んだ中には稜殻が認められる。形状は高台から八の字状に開き、口辺部がいたんくびれ、口縁端部に続いている。140は図示した中では唯一遺構から出土したもので、これはSD2からである。高台は断面三角形を呈し、底部内面中央には押圧痕がみられる。灰白色の均質手の碗である。

2. 大平鉢・片口鉢 (141~145)

この鉢類は底部付近の細片がほとんどである。そのうち5点を図示した。141・142の腰部外面にはヘラ削り調整で、高台は丹念なまでにより接着されている。内面底部の中央は盛り上がりしており、器壁内面は磨耗して滑らかである。胎土に砂粒を多く含み暗灰色を呈す。143は片口の口縁部細片である。外面の器壁は他の鉢に比べ緻密であるが、内面は磨耗と剥落が激しい。144・145は外面にあばた状の凹凸が広がり、内面は底部に向かうにつれ滑らかである。他の大平鉢と同様に腰部にはヘラ削り調整が施される。

3. 小皿 (146~164)

完形資料及び細片を含めた総数は200点ほどである。これらは復元すると約50個体になると思われ、そのうち19点を図示した。口縁端部に面取り調整が施されるもの(146・149・152・157)と丸く收められるものの2種類がある。またほとんどの底裏には回転糸切り痕が認められる。口径は7.1cm~9.4cmを計る。なお146~157は荒肌手、158~164は均質手である。146と148は口縁に部分的に自然釉が見られ、147の内面全体には自然釉が付着している。底裏にある回転糸切り痕がヘラ削り調整によって消されている。149はSD2より出土したものである。150は内面底部に部分的に炭化物の付着が見られた。151の内面にはロクロメが看取できる。152の体部は外反し直線的に開く。158~164は内面底部中央にナデ調整が施される。形態としては、外反しつつ開いていくタイプと、丸みをもって開くタイプに分けられる。多くは無高台であるが、158・159のように低い高台が形成されているものもある。灰白色を呈し、底裏には荒肌手と同様に回転糸切り痕が認められる。

第7節 窯窯製品（第18図 165～172）

古瀬戸後期Ⅲ・Ⅳ期の製品を主体とする。器種で確認したものは擂鉢、香炉、内耳鍋、瓶子、四耳壺、天目茶碗、平碗、縁釉碗、盤（皿）類として折縁深皿、直縁皿、おろし目付皿、縁釉小皿、腰折皿である。出土点数にして最も多かったものは平碗で16点（細片）を数える。ついで折縁深皿の14点、縁釉小皿、天目茶碗の各10点である。その他の器種は2～4点の出土にとどまる。これらの時期は瓶子・おろし目皿・有耳壺は古瀬戸前期と思われる製品で、その他は後Ⅳ期に属するものである。

1. 折縁深皿（165）

内面胸部の下位におろし目が施される。いわゆるおろし目付き大皿である。底部には十文字の刻みを付けた脚が貼付される。これは復元推定すると3方向にあったと思われる。底裏はヘラ削りが施され焼成は堅密である。古瀬戸後Ⅳ期（新）に位置付けられる。

2. 擂 鉢（166）

166は古瀬戸後Ⅳ期（新）に比定される。青黒色を呈す錫釉を施し、底部から強く外に開く。口縁は外側に丸くふくらみ内湾する。底裏には回転糸切り痕が見られる。よく使いこんであり、内面の腰部と底部にかけてかなり磨耗している。その他は破片数から個体数にして2個体に復元できると思われ、ともに後Ⅳ期に比定される。

3. 天目茶碗（167・169・170）

天目茶碗と確認できる破片数は10個を数える。すべて後Ⅲ期から後Ⅳ期に比定される。167はSD1より出土したもので、口縁部は垂直に立ち上がり、途中わずかにくびれたのち外反する。腰部と高台部には錫釉がかかり、体部に付けられた鉄釉は黒色と茶色の混合である。169は灰釉の天目茶碗である。腰部は露胎を呈し口縁部は垂直に立ちあがり、ややくびれたのち端部は尖る。170の形状は169のくびれがなくなったタイプである。腰部は無釉、釉薬を施さない露胎である。口縁付近は茶色系、それより下は黒色系の釉の発色である。

4. 縁釉小皿（168）

破片数にして10点を確認した。これらは3個体に復元できる。皿の他、茶色系の発色の釉が施される縁釉の碗も1点出土した。168は口縁内外面に灰釉が施され、胎土は黄灰白色を呈す。底裏には回転糸切り痕が残り、体部中段で張りを持つ。

第8節 大窯製品（第18図 172）

出土点数は少なく、破片数にして天目茶碗、端反皿が各4点、擂鉢が9点であった。時期はすべて大窯1期に比定される。そのうち172の擂鉢の口縁部細片を図示した。これはSD1より出土し、青黒色の錫釉が施されるが風化のため剥落が激しい。

第9節 中國陶磁（第18図 171・173～176）

出土点数は青磁14点、白磁3点、青白磁1点を数える。青磁のうち11点は龍泉窯系の碗で、同安窯系のものは2点の出土が確認された。また折縁皿は171の1点であった。この釉調は薄い緑色の発色である。173は龍泉窯系青磁の碗で、外面体部に鏽連弁の文様を有す。176は同じく碗の底部である。高台は断面四角で部分的に釉を受けるが、高台内部は露胎である。釉は青みがかかった緑色の発色で内面底部には草花文が描かれる。底部の器肉が厚いのが特徴である。白磁の内訳は皿、口禿の碗、碗が各1点である。175は皿の底部で高台は削り出しの厚い輪高台である。釉は体部下半まで施釉され黄色が少しかかった発色である。胎土は灰白色で若干黒い細粒を含む。青白磁として固化したものは174の合子の蓋である。釉は透明感のある青白色の発色を呈すが、裾部には釉が施されない。肩部にはヘラ状の工具で押されたような削ぎが2箇所に認められる。

第10節 常滑系製品（第18図 177～194）

177から182は口縁部の細片断面図を示した。177、口縁端部が斜め上方にわずかに伸びる。178、口縁端部が垂直方向に伸びる。179、口縁端部が178より細く突き出し下端部もわずかに下方に伸びる。180、口縁の側面がやや凹み、N字状に近付いてくる。182は181より口縁下端部が下へ伸びたもので幅の広い縁帯をもつ。183以下は肩部に施された押印の数々を示した。183、連続する縦線に横線が1本貫通する。184は183より縦線の間隔が広いものである。185・191、縦線と横線7本で構成される格子文である。186～189は縦線と横線2本で構成される格子文である。190、米状の文様が縦線の中間に配される。192、連続した長方形の浮線文があり、長方形の対角を結ぶ斜線が加わる。193、たて線、斜線、横線が複雑に交錯した押印。194、米状の文様が2列3段で構成される。

第11節 土師質土器（第19図 195～228）

完形品は16点。残存率が1/2程度のものは30点強。それ以下の破片数は650点余りにおよび遺物の遺存状態は良好とはいえないかった。出土したものに共通することは、総じて非ロクロ成形ということである。また、煤が付着しているものは確認した中で10点強と、傾向として少ないものといえる。

土師皿の口径によって大きく1～3の3種類に分けた。これは小皿、中皿、大皿の3種類と考えてよい。1類は9cm未満が目安で、ほとんどは平面形態が丸底状のものである。その底部外面には指頭痕や爪形痕が認められた。2類は9cm以上14cm未満を目安で、扁平な平底状をなし均整のとれたものが多く見られた。これは制作過程の違いであらわれるものと思われる。つ

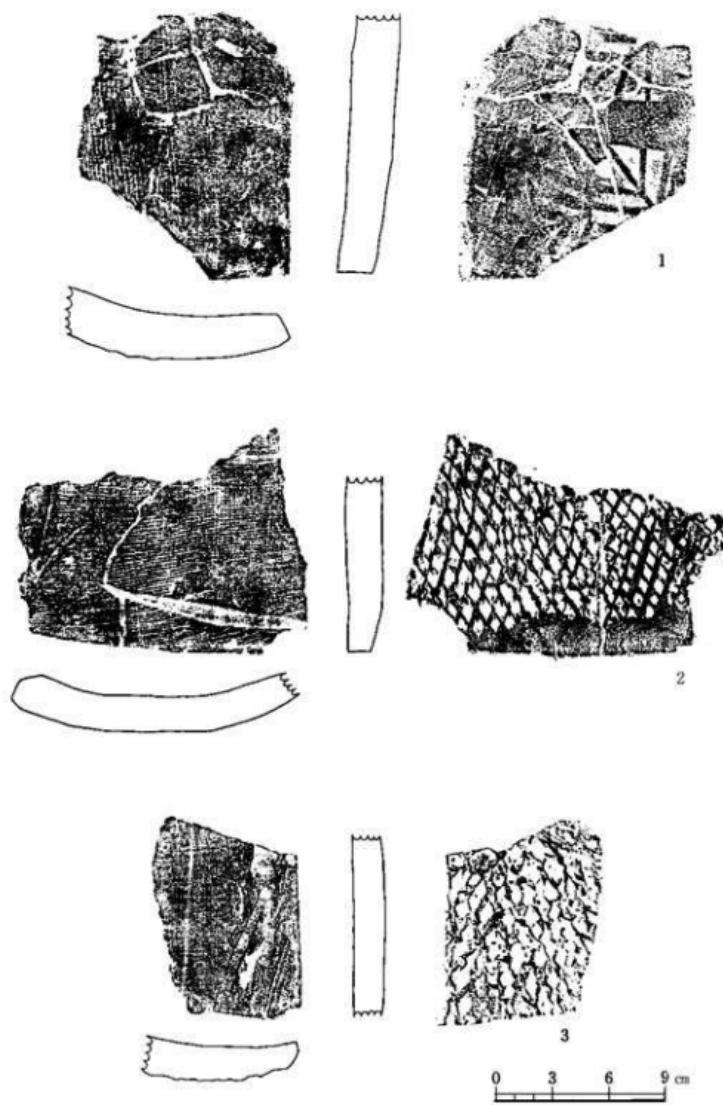
まり1類は手のひらに収まる大きさで、手づくねによる丸底が作り出され。2・3類は粘土板からの成形がなされたものと思われる。206は1類のなかでも均整のとれた作りのもので、口縁外面には横なでによる整形が施される。216の側面形態は平底といえるが底裏中央を外面から押圧してあり上げ底状をなす。同様のものは221である。236は城之内遺跡出土の土師皿としてはめずらしいほうに属し、口縁端部が内湾気味に丸く收められているものである。深さは3.5cmと皿類のなかでは最も深い。

第12節 土錘（第19図 229～237）

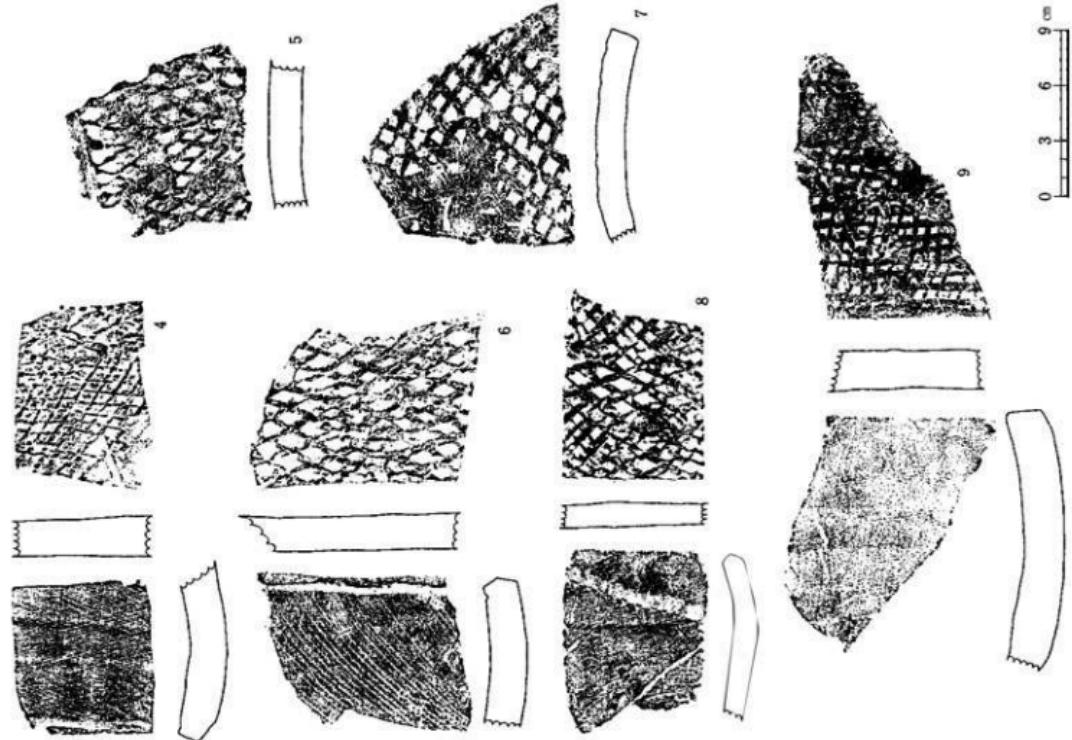
69点の出土である。そのうち代表的なものを図示した。234のように細身で棒状を呈するもの、235のように胸部中央がふくらむもの、230のように両側縁が平行に近いものの3種に分けられる。

第13節 その他の出土遺物（第19図 238～245）

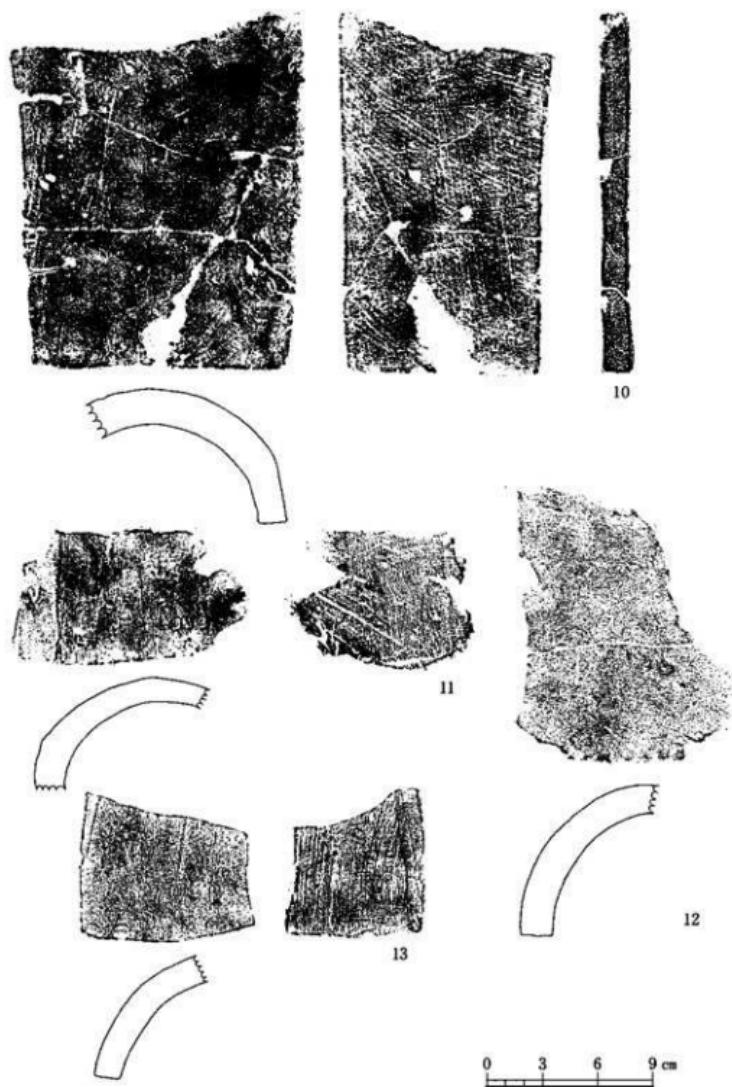
238は土製紡車である。239は縁釉の小壺である。胎土の色調は淡灰白色を呈し、焼成は軟質である。釉の発色は薄い緑色で底部と胴部に部分的に付着する。240は土鉢、241は土鉢の玉と考えられる。242から244は製塙土器の脚部である。3点とも淡赤褐色を呈し二次焼成を受ける。245は銅錢である。銭貨名は皇宗通宝、初鑄年は1039年である。



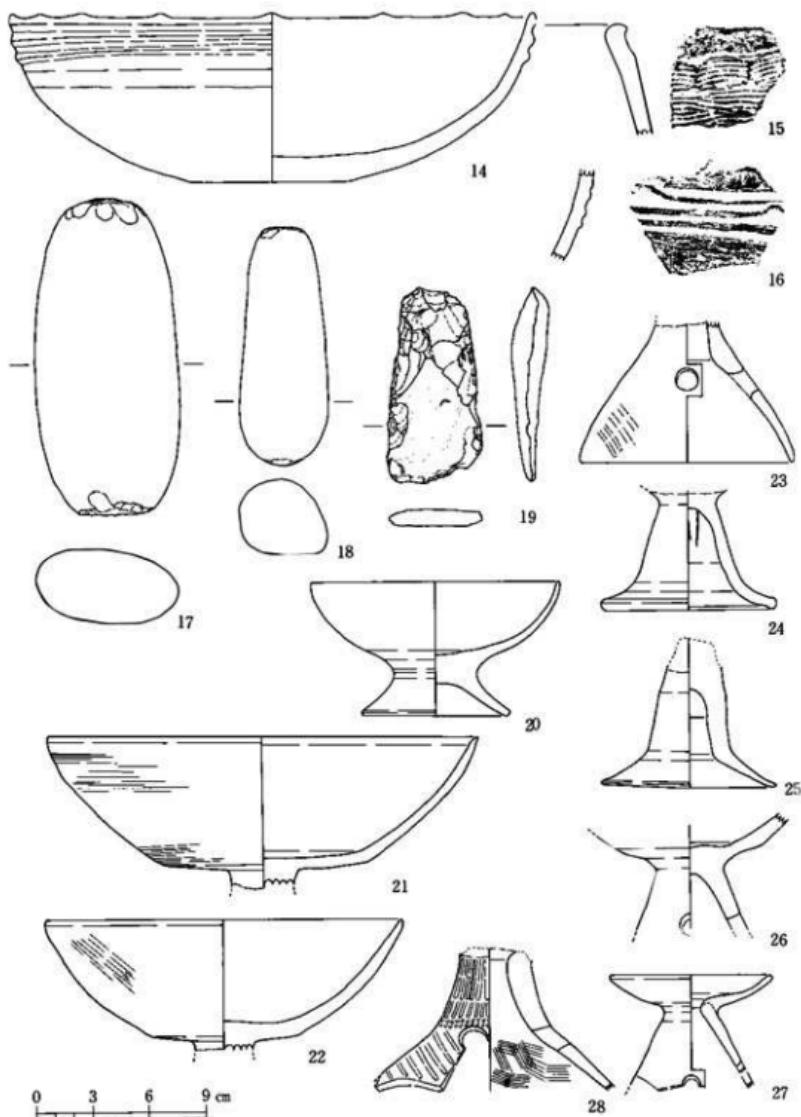
第7図 出土遺物(1)平瓦実測図



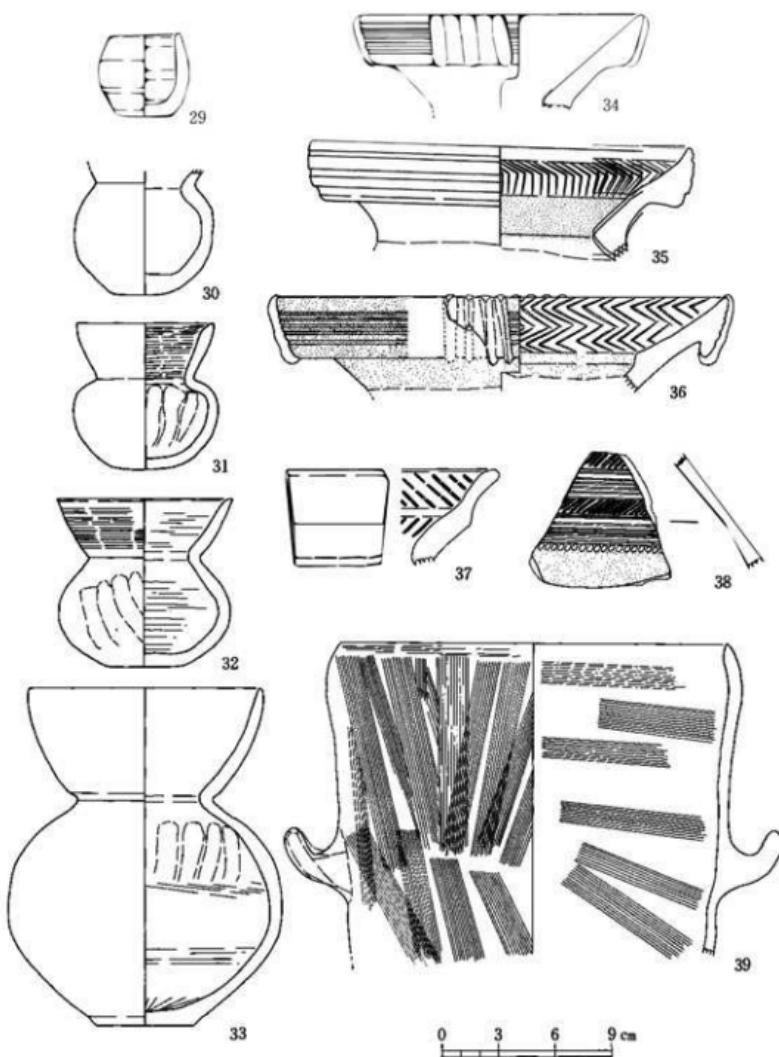
第8圖 出土遺物(2)平瓦殘片圖



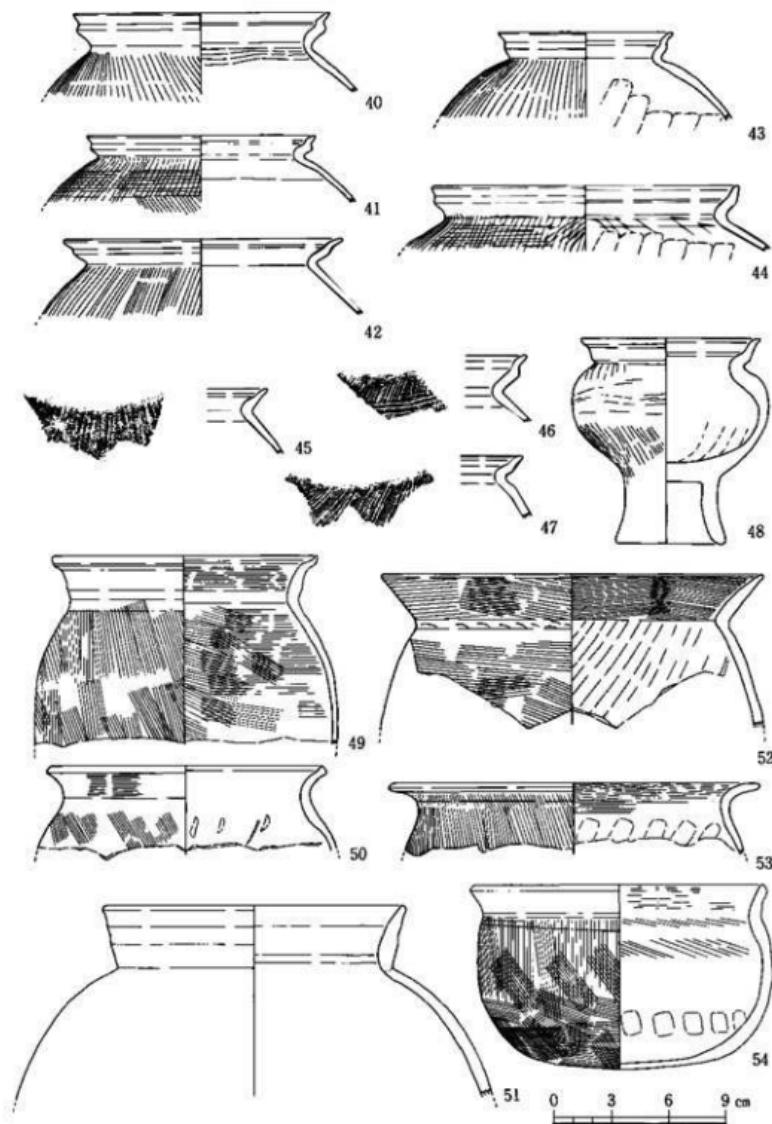
第9図 出土遺物(3)九瓦実測図



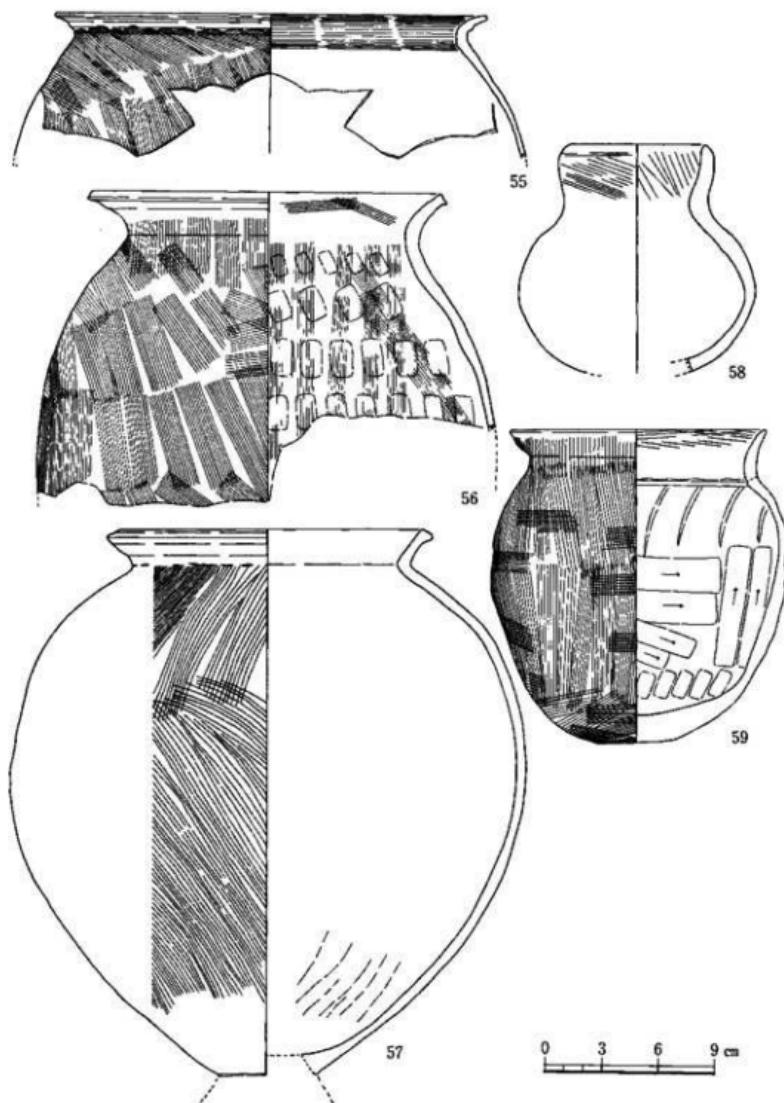
第10図 出土遺物(4)実測図



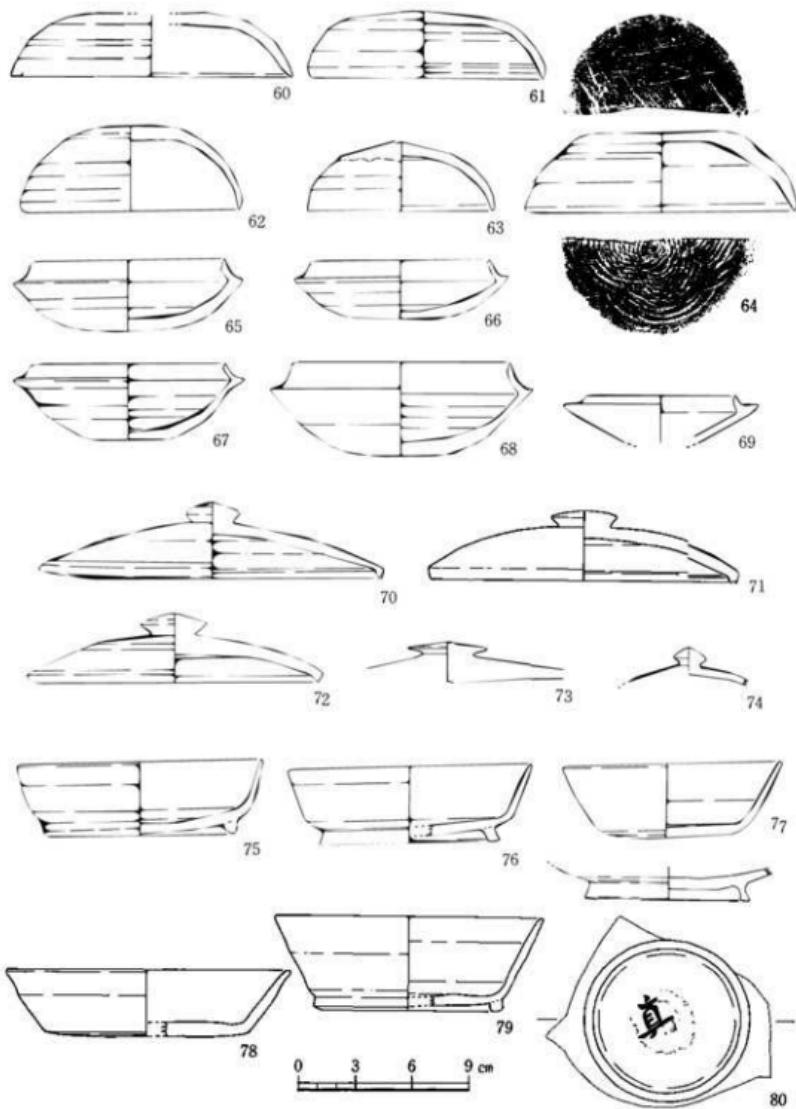
第11図 出土遺物(5)実測図



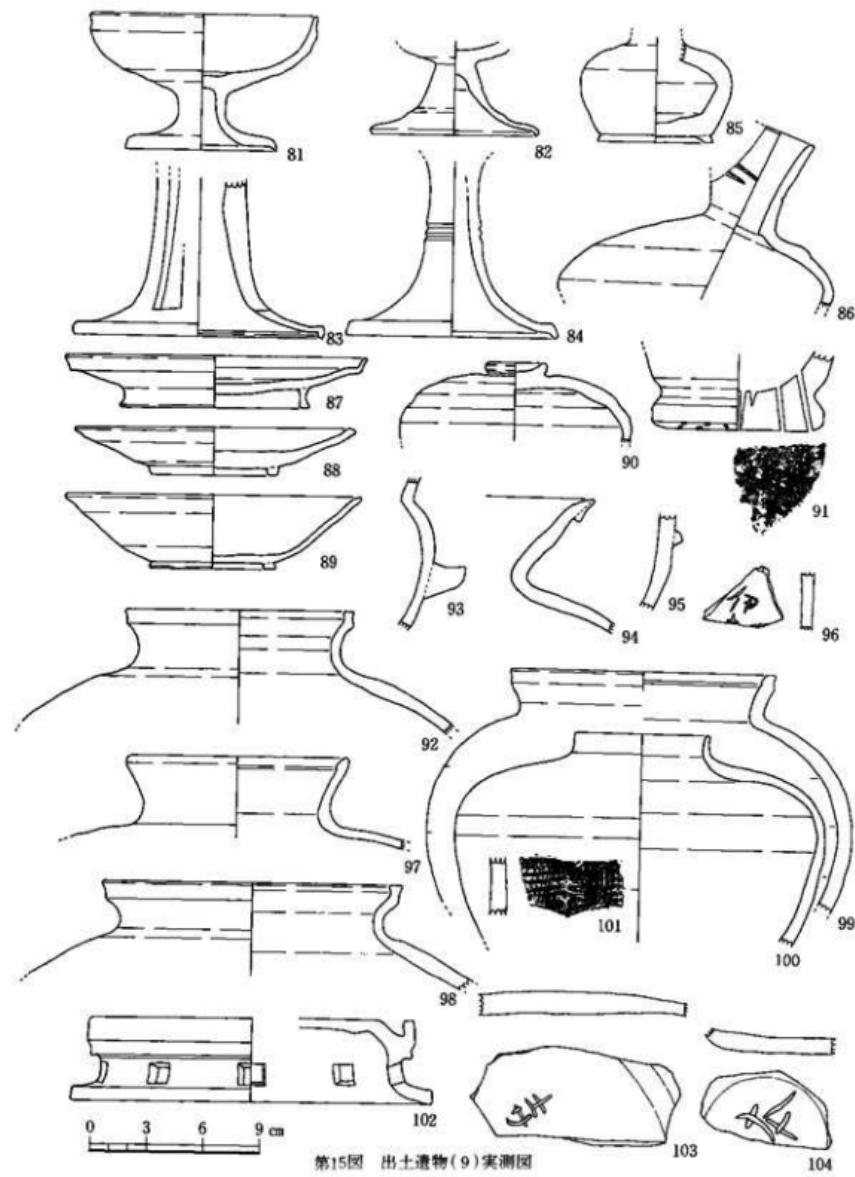
第12図 出土遺物(6)実測図



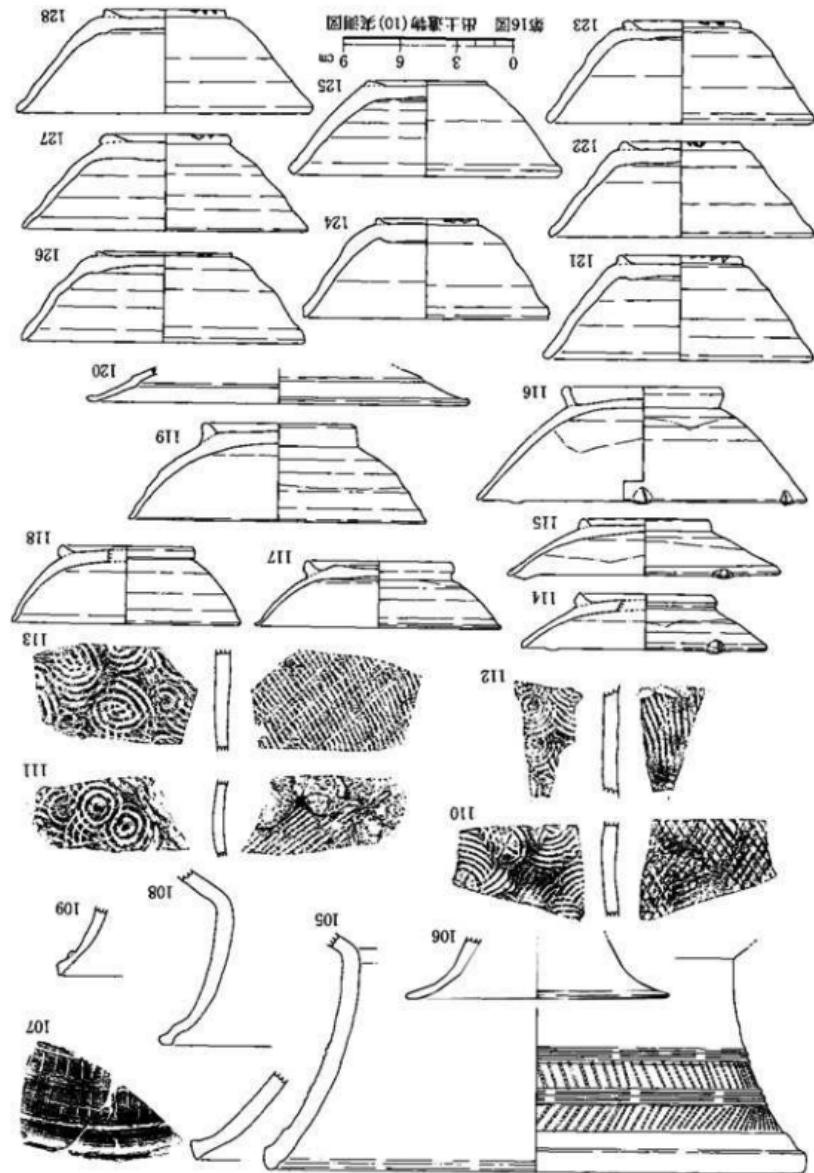
第13图 出土遗物(7)实测图

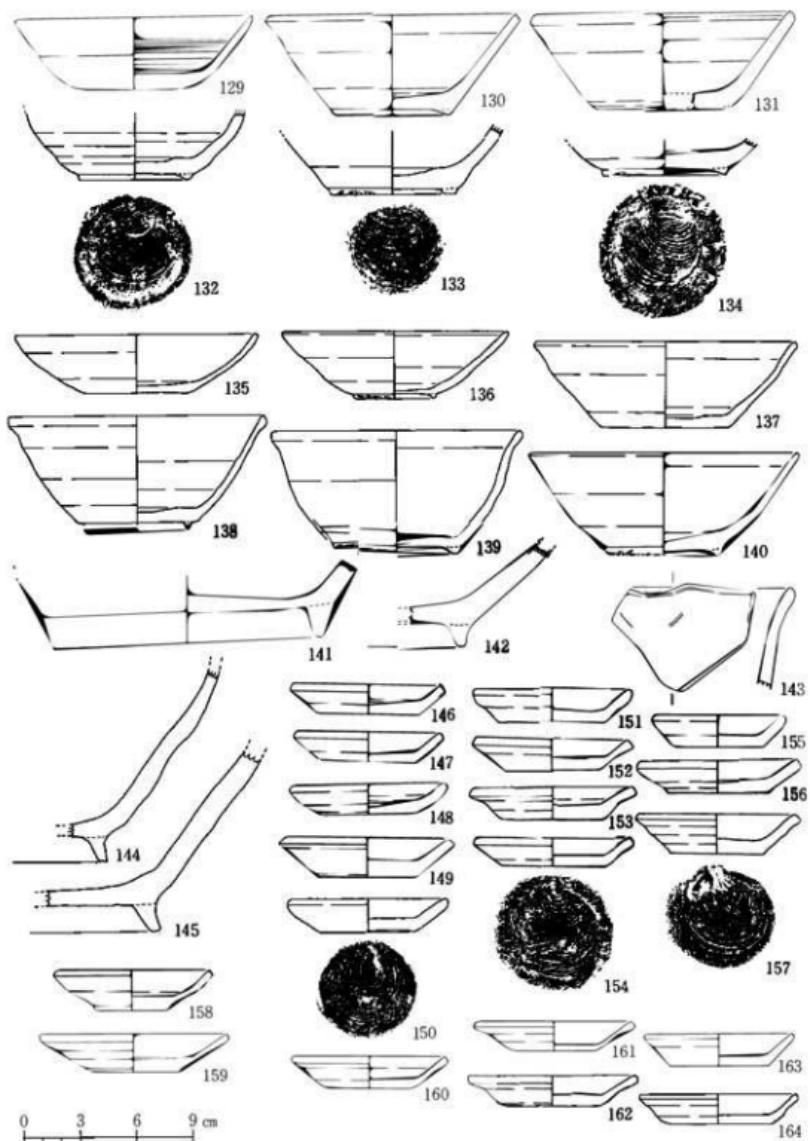


第14図 出土遺物(8)実測図

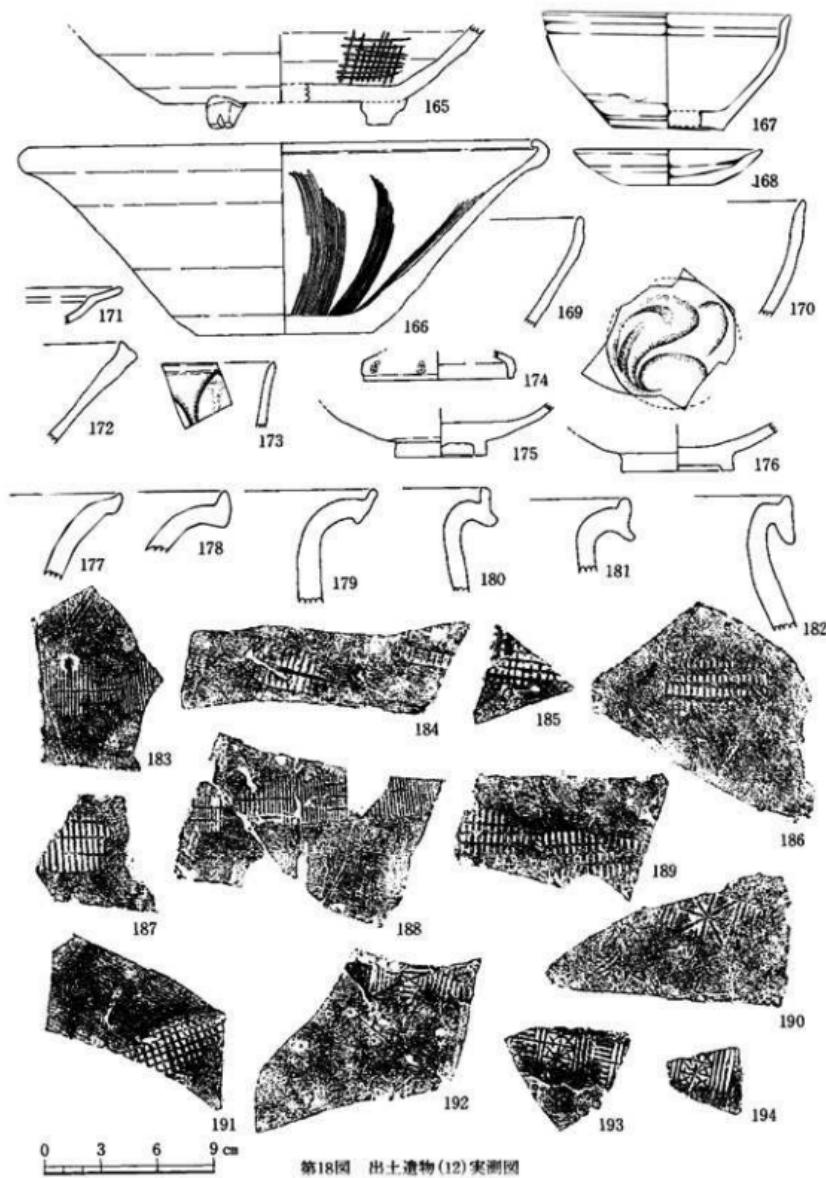


第15図 出土遺物(9)実測図



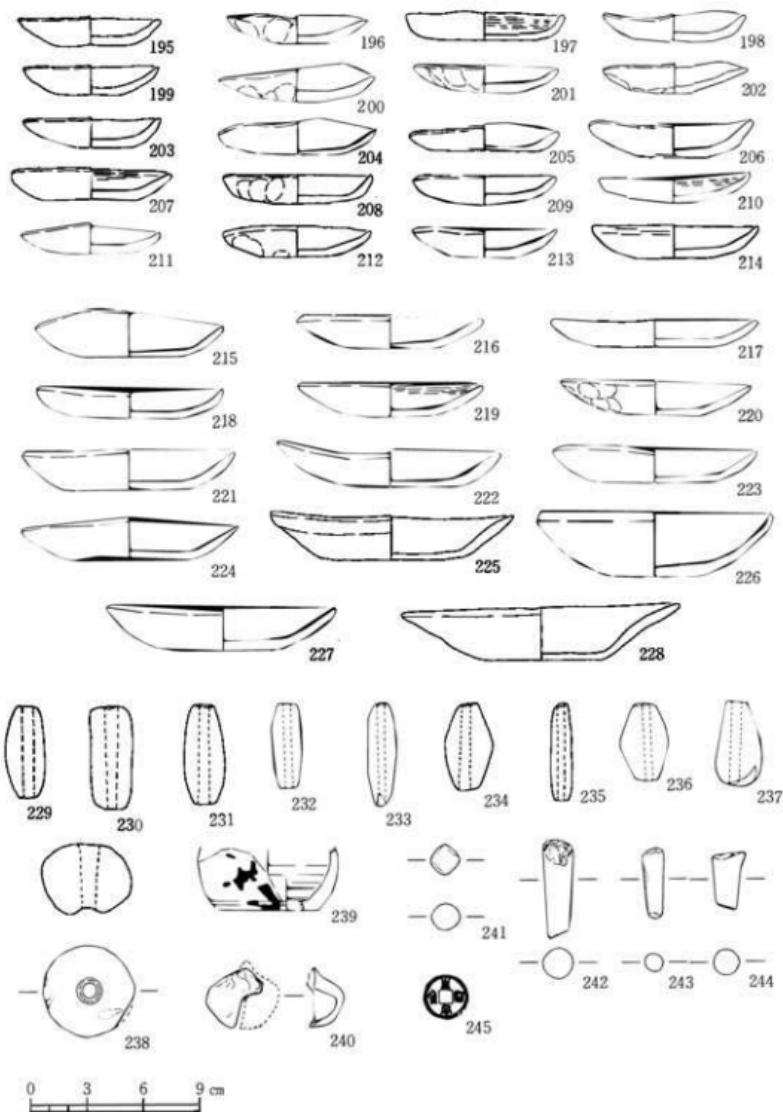


第17図 出土遺物(11)実測図



第18図 出土遺物(12)実測図

0 3 6 9 cm



第19図 出土遺物(13)実測図

第5章 結語

今回の発掘調査により、縄文時代晩期から中世に至る遺物が検出されたことは、過去2回行われた城之内遺跡の調査の成果を加味して、改めてこの長良城之内という地域が良好な生活・生産の土地であったことを裏付けるものであろう。しかし遺構に伴う遺物が少なく、なおかつ地形の変更によって層位的な把握が難しい状況では、遺跡の性格を詳細に検討することに無理があるのではないかと思われる。

第1章で述べたように、この地は長良庵寺に伴う遺構の検出に期待がもたれていたが、寺院施設または寺院に伴う遺構は明確にできなかった。長良庵寺が存続したと思われる時期（白鳳時代）と同じ時期に比定できる須恵器が多数検出されたことや、「寺」の文字がヘラ書きされた須恵器の存在は、寺院そのものの存在を示唆するにとどまる。なお須恵器の時期は7世紀後半から8世紀前半に主体をおく。以下、遺構をもとに考えてみる。

発掘区域東側に伸びる2条の溝については一見して二つの考えが浮かんでくる。一つは宗教施設に伴うもの。もう一つは中世の屋敷地に多く見られる溝である。時期的な問題に関して言えば出土した遺物より後者が妥当のように思われる。特にSD2は13世紀の所産を想定しており、北側において東方向に直行する溝を持ち、明らかに何らかの規制を示す方形区画であると思われる。

次に2基検出された井戸跡であるが、SE1・2とともに埋土上位に人頭大の礫の混入がみられるものの、いわゆる素堀り井戸の範疇に収まると思われる。時期を示す遺物は白磁系陶器の小皿の細片で決定力に欠ける。性格不明な遺構である。

続いてSK2からSK4に見られる敷石土壤に注目する。これは第3章において述べたように中世の墓壙と考えられる。葬られた人々の身分を性格には定めにくいことであるが、中世においては古代より普遍的に墓地群が見られることを小規模であるが本調査区域でも示している。

最後に遺物について特記するものは、須恵器・白磁系陶器に見られる墨書き土器、これに関係を有する円面圓足硯、縁釉の小壺が挙げられる。また青磁の碗・青白磁の合子など12~14世紀の同安窯・龍泉窯系に推定させる遺物が出土している。これらより大きく城之内遺跡を評価すると8世紀以降の公的な立場にある遺跡であることが確かなものになったと考えられる。

出土遺物観察表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	焼成	胎土	輪	胎土	種	社刊ガフ	備考
1	瓦	平瓦	14.0	—	2.4	1/8	凹面に布目底 凸面に放射状の叩き底	やや軟	砂粒小量	灰白	B-1			
2	瓦	平瓦	—	—	1.8	1/8	凹面に布目底 横骨底 布の合わせ目底	軟	砂粒含む	灰白	表撰			
3	瓦	平瓦	—	1.5	1.8	1/10	凹面に布目底 凸面に斜格子の叩き底	堅緻	砂粒小量	灰白	B-1			
4	瓦	平瓦	6.7	—	2.0	1/10	凹面に布目底 凸面に斜格子の叩き底	中	砂粒含む	明灰白	B-1			
5	瓦	平瓦	—	—	1.8	1/10	凹面に布目底 凸面に斜格子の叩き底	軟	砂粒小量	灰白	C-1			
6	瓦	平瓦	10.7	—	1.9	1/10	凹面に布目底 その後ハケメ状に再調整を受ける	堅緻	砂粒小量	暗灰	D-4			
7	瓦	平瓦	5.9	—	1.6	1/9	部分的に煤を受けて黒色化	軟	砂粒小量	明灰白	B-1			
8	瓦	平瓦	2.5	—	1.1	1/10	凸面に大きく荒い格子目の叩き底	やや軟	砂粒含む	明灰白	B-1			
9	瓦	平瓦	1.9	—	1.2	1/8	凹面に布目底 凸面に格子目の叩き底	軟	砂粒含む	灰	B-1			
10	瓦	丸瓦	10.5	—	2.0	1/4	側面部にヘラ削りを受ける	中	砂粒小量	白	B-2			
11	瓦	丸瓦	—	—	1.4	1/8	凸面に薙刀工具による削りを受ける	堅緻	砂粒含む	灰褐色	C-3			
12	瓦	丸瓦	—	—	1.7	1/5	風化作用により表面はもろい	軟	砂粒小量	赤茶	C-1			
13	瓦	丸瓦	1.6	—	1.6	1/8	凹面に布目底	堅緻	砂粒小量	灰褐色	E-1			

番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	種	社刊ガフ	備考
14	陶文	浅鉢	21.0	1.8	1.1	1/2	縁部に2条の浮縁がめぐる	黒母多い	茶褐色	C-3			
15	陶文	甌	—	—	—	口縁縮片	貝殻によるナデ調整	多い	茶褐色	E-1			
16	陶文	浅鉢	—	—	—	口縁縮片	沈殿による施文	黒母多い	黒褐色	D-1			
17	石器	礫石	7.6	16.7	1.9	完形	石材は砂岩	青白	表撰	8.65g			
18	石器	礫石	4.7	12.6	4.0	完形	石材は砂岩	青白	B-1	3.92g			
19	石器	打製石斧	4.9	16.4	0.9	完形	磨形	黒	C-1	9.2g			
20	土師器	高环	13.1	7.1	7.1	1/2	砂粒多く1~3mmを多く含む	多い	淡黄	E-1			
21	土師器	高环	21.9	—	—	环 1/1	丹波窯が部分的に残る	少い	淡褐	C-1			
22	土師器	高环	18.0	—	—	环	丹波窯 入念なヘラミガキ	少い	淡褐	C-1			
23	土師器	高环	—	—	11.1	脚 1/1	円形の透孔 ヘラミガキ	多い	淡褐	D-1			
24	土師器	高环	—	—	9.1	脚 1/1	透孔なし	並	赤褐色	A-1			
25	土師器	高环	—	—	9.1	脚	小石を多く含む	多い	淡褐	C-1			
26	土師器	高环	—	—	—	1/2	円形透孔3箇所	多い	淡褐	表撰			

順序	種類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	様	社内分	備考
27	土師器	高杯	1.6	-	-	1/2	円形透孔4ヵ所	少い		淡黄	B-1		
28	土師器	高杯	-	-	-	1/4	外面ヘラミガキ 内面クシ削り	少い		淡黄	D-1		
29	土師器	盃に付7	1.1	4.1	1.9	完形	手づくね	少い		淡赤褐	B-4		
30	土師器	盃に付7	-	-	2.5	2/3	手づくね	少い		淡赤褐	B-4		
31	土師器	盃に付7	7.1	7.5	2.5	完形	手づくね	少い		淡赤褐	C-3		
32	土師器	盃	3.4	5.0	1.8	完形	全面ナデ調整	並		黄灰白	E-3		
33	土師器	盃	11.6	18.2	5.2	1/2	入念なナデによる調整	並		黄灰白	C-3		
34	土師器	盃	15.5	-	-	口縁 1/2		少い		淡褐	B-2		
35	土師器	盃	18.1	-	-	口縁 1/2	部分的に凸彫が施される	並		淡褐	C-2		
36	土師器	盃	14.1	-	-	口縁 1/2	丹影が外面と内面頸部に施される	並		淡黄灰	C-1		
37	土師器	盃	-	-	-	口縁細片	くの字状の刺突文	多い		淡黄灰	C-4		
38	土師器	盃	-	-	-	肩部細片	刺突文及び丹影	少い		淡褐	A-1		
39	土師器	瓶	20.5	-	-	1/4	外面縦位の細かなハケメ 内面は横位と斜位のハケメ	並		淡黄灰	E-4		
40	土師器	台付甕	11.5	-	-	口縁 1/2	体部外面上半によこハケ 屋曲部内面にもよこハケ	多い		淡褐	C-3		
41	土師器	台付甕	11.0	-	-	口縁 1/2	外面クシ調整	多い		黄褐	A-2		
42	土師器	台付甕	14.5	-	-	口縁 1/2	口縁部上段の外反が強い	多い		褐	B-4		
43	土師器	台付甕	9.1	-	-	口縁 1/2	体部模ハケの省略化	多い		黄褐	D-1		
44	土師器	台付甕	14.1	-	-	口縁 1/2	口縁上段は直口気味	多い		淡褐	C-1		
45	土師器	台付甕	-	-	-	口縁細片		多い		黄灰	C-3		
46	土師器	台付甕	-	-	-	口縁細片	体部上半にクシがきによる平行線文	多い		褐	B-3		
47	土師器	台付甕	-	-	-	口縁細片		多い		褐	C-1		
48	土師器	台付甕	9.4	18.5	5.8	完形	厚手のつくり 外面クシ調整	並		黄灰	E-3		
49	土師器	甕	14.1	-	-	1/2	細かなハケメが全面に施される	少い		黄灰白	B-1		
50	土師器	甕	14.9	-	-	口縁部		少い		淡赤褐	B-1		
51	土師器	甕	16.0	-	-	口縁部	外面ヘラミガキ 肩部と口縁部に塗の付着	少い		淡黄灰	B-3		
52	土師器	甕	20.1	-	-	口縁部	ハケメが外面全体に施される	多い		黄灰白	C-3		
53	土師器	甕	19.5	-	-	口縁部	内面に指標圧痕あり	多い		淡褐灰	B-1		
54	土師器	甕	11.6	9.9	5.0	4/5	胴部上半に縦位のハケメ 下半は横位・斜位のハケメ	多い		淡黄灰	C-1		

器種	種類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	種類	肚判	備考
55	土師器	甕	11.1	-	-	口頸部	口縁内面にハケメがめぐる 薄手のつくり	多い	淡黄灰	E-1			
56	土師器	甕	18.2	-	-	1/3	脚部に窓の付着あり 長脚甕	多い	淡黄灰	B-1			
57	土師器	台付甕	17.4	-	-	脚部欠	口縁周辺は平坦 いわゆる宇田型甕	多い	茶褐	C-1			
58	土師器	丸底甕	7.4	-	-	底部欠	内外面にヘラミガキ	並	茶褐	D-1			
59	土師器	甕	11.5	-	-	脚部欠	台付甕の變のみの遺存 外面ハケメ 内面ヘラ削り	多い	赤褐	B-1			
60	須恵器	环蓋	14.9	3.3	-	1/2	横ナデ調整 和泉陶色よりの嵌入品か	並	暗緑	A-4			
61	須恵器	环蓋	11.1	3.5	-	ほぼ完形	頂部ヘラ削り調整 体部は内外面ともに横ナデ調整	並	綠灰	C-2			
62	須恵器	环蓋	11.5	4.5	-	完形	ヘラ起こし痕あり	少い	灰	A-2			
63	須恵器	环蓋	10.0	3.7	-	完形	ヘラ起こし痕あり	並	淡綠	A-1			
64	須恵器	环蓋	14.2	4.1	-	完形	内面頂部に当て具痕 外面頂部にたたき具痕	並	暗緑	C-2			
65	須恵器	环身	10.5	2.9	4.5	4/5	底部外周へラ起こし痕	並	灰黄白	D-1			
66	須恵器	环身	9.6	2.2	3.0	4/5	ヘラ起こし痕	少い	灰白	D-2			
67	須恵器	环身	10.5	4.6	4.6	1/2	器壁にナデ調整	少い	灰	E-2			
68	須恵器	环身	11.9	1.6	3.0	1/4	器壁にヘラミガキ	少い	暗緑	E-2			
69	須恵器	环身	8.0	-	-	1/3	外面一部自然跡を受ける	少い	灰	B-1			
70	須恵器	环蓋	18.1	4.0	-	完形	外面ヘラ削り後横ナデ調整	並	灰白	B-1			
71	須恵器	环蓋	18.1	3.7	-	1/2	外面ヘラ削り後横ナデ調整	多い	灰白	B-3			
72	須恵器	环蓋	15.2	3.6	-	1/3	内面横ナデ調整	少い	青灰白	C-4			
73	須恵器	环蓋	-	-	-	1/4	外面自然跡を受ける	並	灰白	C-1			
74	須恵器	环蓋	-	-	-	1/6	外面自然跡を受ける 内外面横ナデ	少い	灰白	B-2			
75	須恵器	环身	13.1	1.8	19.1	ほぼ完形	台付きの环身 灰釉が斑点状に付着	並	淡黄灰白	E-1			
76	須恵器	环身	13.8	4.0	9.3	2/3	台付きの环身 ヘラ削り後横ナデ調整	並	淡黄灰白	E-1			
77	須恵器	环身	11.5	1.9	4.7	2/3	無台环身 内面すべて横ナデ調整	並	青灰	B-3			
78	須恵器	环身	15.0	1.6	19.1	1/2	無台环身 内外面横ナデ調整	並	灰白	B-2			
79	須恵器	环身	14.0	5.1	18.0	1/3	有台环身 内外面横ナデ調整	少い	灰白	B-3			
80	須恵器	环身	9.7	-	-	底部	墨書き「真」あり	並	青灰白	D-4			
81	須恵器	高环	12.6	1.3	3.0	ほぼ完形	全面ナデ調整の仕上げ	並	暗緑	D-4			
82	須恵器	高环	-	-	3.1	2/3	脚外面にナデ調整	少い	灰白	B-2			

番号	種類	器種	口径	基高	底径	残存部	器形・技法上の特色	動土	範	胎土	種	肚方寸	備考
83	須恵器	高坪	-	-	11.1	1/4	脚に3方の透孔	少い	灰白	E-3			
84	須恵器	高坪	-	-	11.1	1/3		少い	灰白	C-3			
85	須恵器	II	-	-	6.1	1/3	脚部は横ナデ調整 脚部上半に自然輪	並	灰白	表揮			
86	須恵器	平板	-	-	-	1/2	脚部は横ナデ調整	少い	灰鵝	D-3			
87	須恵器	皿	14.9	2.5	4.7	完形	内・外面ヘラ削り調整	少い	灰白	D-4			
88	須恵器	盤	16.6	2.1	10.0	完形	底部外面回転ヘラ削り	並	灰	B-2			
89	須恵器	楕	15.7	1.9	6.6	ほぼ完形	巻きあげ底あり 内外面に横ナデ調整	並	灰白	C-3			
90	須恵器	高坪蓋	-	-	-	2/3	有蓋高坪の蓋 体部外面回転ヘラ削り	少い	青灰	B-1			
91	須恵器	椭体	-	-	8.0	底部 1/4	内部外部より刺突される	少い	青灰	B-2			
92	須恵器	束	12.0	-	-	口縁部	外部自然輪受ける	並	灰鵝	B-1			
93	須恵器	束	-	-	-	口縁細片	把手付きの束 脚部に角状の耳	並	灰白	B-1			
94	須恵器	束	-	-	-	口縁細片	折り返し口縁 口縁内部に横ナデ	少い	青灰	E-3			
95	須恵器	頭部細片	-	-	-	頭部細片	断面Uの字状の凸唇が貼付	少い	黄灰白	B-2			
96	須恵器	坪蓋	-	-	-	細片	ヘラ書で「伊」の字	少い	灰白	C-1			
97	須恵器	横板	11.5	-	-	口縁部	外面に叩き具底 内面に当て具底	並	鵝灰	E-3			
98	須恵器	束	16.0	-	-	口縁部	自然輪を外面全体に受ける	並	鵝灰	B-1			
99	須恵器	壺	14.0	-	-	1/3	外面南部へラ削りの後の横ナデ	並	黄灰白	C-4			
100	須恵器	壺	7.1	-	-	1/4	外面へラ削り	並	灰	B-1			
101	須恵器	束	-	-	-	細片	外面にヘラ書きあり	並	灰	A-1			
102	須恵器	円面鏡	-	4.4	19.1	1/4	短脚で長方形の透孔が遡る	並	灰	B-1			
103	須恵器	坪蓋	-	-	-	細片	「寺」の文字が書かれる	並	灰	C-2			
104	須恵器	坪	-	-	-	細片	「本」の文字が書かれる	多い	灰白	B-4			
105	須恵器	壺	15.1	-	-	口縁部	刺突文が沈線によって区画される	並	灰鵝	E-4			
106	須恵器	壺	14.6	-	-	口縁部	外面横ナデ調整 内面自然輪を受ける	並	灰鵝	C-1			
107	須恵器	束	-	-	-	口縁細片	脚底下に沈線が遡りその下に刺突文がある	少い	鵝灰	E-3			
108	須恵器	長頸壺	-	-	-	口縁細片	外面へラ削り調整	少い	青灰	E-3			
109	須恵器	束	-	-	-	口縁細片	脚底下に凸唇が遡る	並	青灰白	E-2			
110	須恵器	壺	-	-	-	細片	内面両心円状の当て具底 中央に十字の刻みあり	少い	黄灰白	A-3			

番号	器種	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	輪	社刊号	備考
111	須恵器	甕	-	-	-	縦片	外面に平行叩き目文 内面同心円文	少い	暗灰	B-1			
112	須恵器	甕	-	-	-	縦片	外面平行叩き目文 内面渦巻き文	少い	灰白	C-1			
113	須恵器	甕	-	-	-	縦片	外面平行叩き目文とヘラ削り	並	濃灰	表採			
114	白甕	輪花盆	13.1	1.9	7.0	1/2	灰釉はつけがけ、外面は横ナデ調整	少い	淡黄灰白	B-4			
115	白甕	輪花盆	14.4	1.0	6.6	2/3	口縁端部は外側に折り曲げられる	少い	灰白	B-2			
116	白甕	輪花鉢	17.8	6.0	8.1	1/3	内面底部よく磨耗している	少い	淡黄灰白	B-2			
117	白甕	小鉢	13.0	1.1	7.6	1/3	外面横ナデ調整 底部糸切り底あり	少い	淡黄灰白	B-4			
118	白甕	鉢	12.1	4.1	6.0	1/3	内外面横ナデ調整	少い	淡黄灰白	B-4			
119	白甕	鉢	15.7	3.2	7.7	1/3	底部糸切り底あり	少い	淡黄灰白	E-1			
120	白甕	段皿	19.0	-	-	口縁縦片	内外面に灰釉がかかる	少い	灰白	C-1			
121	白甕系陶器	瓶	14.6	5.7	6.1	完形	体部にロクロ目 高台端に斜板压痕	多い	暗灰	B-3			
122	白甕系陶器	瓶	14.2	3.1	6.7	完形	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	A-4			
123	白甕系陶器	瓶	14.3	1.6	6.0	完形	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	A-4			
124	白甕系陶器	瓶	12.9	3.3	5.1	完形	口縁端に面取り調整	多い	暗灰	B-1			
125	白甕系陶器	瓶	14.4	3.1	6.1	完形	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	A-2			
126	白甕系陶器	瓶	14.3	4.7	7.0	完形	底面部内面中央部に指圧痕あり	多い	暗灰	A-2			
127	白甕系陶器	瓶	15.6	3.1	6.1	完形	付高台はナデ調整で接着	多い	灰	E-4			
128	白甕系陶器	瓶	15.4	3.6	6.1	完形	口縁端部に面取り調整	多い	暗灰	A-4			
129	白甕系陶器	瓶	12.5	3.8	5.9	完形	無高台で薄手の瓶	並	灰白	B-1			
130	白甕系陶器	瓶	12.5	3.1	6.1	完形	外面口縁部に押さえたくびれあり	多い	暗灰	B-1			
131	白甕系陶器	瓶	11.4	3.0	7.0	1/2	高い高台	多い	暗灰	B-1			
132	白甕系陶器	瓶	-	-	5.1	1/2	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	A-2			
133	白甕系陶器	瓶	-	-	6.5	1/2	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	B-1			
134	白甕系陶器	瓶	-	-	6.5	1/4	斜板压痕多い 内面に自然難	多い	暗灰	A-2			
135	白甕系陶器	瓶	12.0	3.1	5.5	完形	底裏に回転糸切り底と板状压痕 無高台純	並	黄白	E-2			
136	白甕系陶器	瓶	12.0	3.6	4.1	完形	体部のロクロ水洗き底明顯	並	灰白	D-4			
137	白甕系陶器	瓶	12.0	4.6	6.6	完形	無高台体部にロクロ水洗き底	並	黄白	D-3			
138	白甕系陶器	瓶	13.6	4.0	5.4	完形	体部のロクロ水洗き底明顯	並	灰白	B-4			

件番	種類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	種	胎土	種	社行方	備考
139	白瓷系陶器	青	13.4	6.5	6.6	完形	内面底部に輪状の凹み	並	灰白	B-3			
140	白瓷系陶器	青	14.1	5.5	5.7	完形	内面底部に押さえ痕	並	灰白	S D 2			
141	白瓷系陶器	大平鉢	14.4	-	-	底部	器壁内面は磨耗し滑らか	多い	暗灰	B-1			
142	白瓷系陶器	大平鉢	-	-	-	底部 1/4	付高台周辺にヘラ削り調整	多い	暗灰	D-1			
143	白瓷系陶器	片口鉢	-	-	-	口縁細片	内面の剥落と磨耗がはげしい	少い	暗灰	D-3			
144	白瓷系陶器	大平鉢	-	-	-	底部 1/4	内面は底部にいくほど滑らか	多い	暗灰	A-4			
145	白瓷系陶器	大平鉢	-	-	-	底部 1/4	底部にヘラ削り調整 あわせた状の凹凸あり	多い	暗灰	A-2			
146	白瓷系陶器	皿	1.2	1.5	5.5	完形	口縁 部分的に自然釉	多い	灰白	A-2			
147	白瓷系陶器	皿	1.7	1.6	5.0	完形	底裏の回転糸切り底がヘラ削りにより消滅	多い	灰白	B-1			
148	白瓷系陶器	皿	1.9	1.6	5.0	完形	口縁部分的に自然釉	多い	灰白	B-1			
149	白瓷系陶器	皿	1.6	2.1	5.2	完形	口縁端部に面取り調整	多い	灰白	SD 2			
150	白瓷系陶器	皿	1.2	1.8	5.2	完形	内面底部に炭化物の付着あり	多い	灰白	B-1			
151	白瓷系陶器	皿	1.2	1.7	5.5	完形	内面にロクロ痕が認められる	少い	暗灰	B-1			
152	白瓷系陶器	皿	7.8	1.7	5.0	完形	口縁部に面取り調整	並	灰白	B-1			
153	白瓷系陶器	皿	1.4	1.7	5.4	完形	底裏に回転糸切り底	多い	暗灰	A-1			
154	白瓷系陶器	皿	1.4	1.4	5.1	完形	底裏に回転糸切り底	並	灰白	B-1			
155	白瓷系陶器	皿	1.1	1.7	4.7	完形	口径が最小 底裏に回転糸切り底	並	灰白	A-1			
156	白瓷系陶器	皿	1.4	1.9	5.3	完形	腹部で若干くびれ八の字状に開く	並	暗灰	B-1			
157	白瓷系陶器	皿	1.2	2.1	4.8	完形	底裏に回転糸切り底	並	暗灰	B-1			
158	白瓷系陶器	皿	1.1	1.2	4.0	完形	薄い高台を作り出される 底部が厚い	少い	灰白	D-2			
159	白瓷系陶器	皿	10.0	2.1	4.8	完形	内面に自然釉と窯變をうける	少い	灰黃白	A-2			
160	白瓷系陶器	皿	8.1	1.7	4.7	4 / 5	内面底部にナデ痕	少い	灰白	B-1			
161	白瓷系陶器	皿	8.0	1.6	4.2	完形	口縁端部に面取り調整	少い	灰白	A-1			
162	白瓷系陶器	皿	8.1	1.6	4.9	完形	内面底部にナデ痕	少い	灰白	B-1			
163	白瓷系陶器	皿	7.9	1.7	5.3	完形	内面底部にナデ痕	少い	灰白	B-1			
164	白瓷系陶器	皿	8.4	1.6	5.3	1 / 2	内面底部にナデ痕	少い	灰黃白	A-1			
165	窓窯製品	折腰深皿	12.5	-	-	底部 1/3	底裏にヘラ削り 窯成は堅既	少い	茶褐	E-3			
166	窓窯製品	盤体	27.0	10.1	9.2	2 / 3	内面底部はかなり膨張	少い	茶褐	C-2			

號料	器類	器種	口径	器高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土 色	胎土 様	社刊FF	備考
167	寄窯製品	天目茶碗	11.0	6.0	6.0	1/4	削りだしの輪高台	少い	明褐	SD 1	
168	寄窯製品	巻物小皿	9.1	1.9	5.1	1/2	底裏に回転糸切り痕	少い	黄灰白	E - 3	
169	寄窯製品	天目茶碗	-	-	-	細片	灰褐色の天目茶碗	少い	黄灰	B - 2	
170	寄窯製品	天目茶碗	-	-	-	細片	口縁付近は垂直に立ち上がり端部は尖る	少い	明褐	E - 3	
171	青磁	折腰皿	-	-	-	細片	中国南磁の口縁部細片	少い	鐵灰	D - 2	
172	大窯製品	團卦	-	-	-	細片	青黒色のさび跡	少い	茶褐	SD 1	
173	青磁	碗	-	-	-	細片	中国南磁 繩泉窯系で輪蓮弁を有す	少い	灰白	B - 1	
174	青白磁	合子の蓋	-	-	3.0	細片	輪は透明感のある青黒色	少い	灰白	B - 1	
175	白磁	皿	-	-	4.0	底部	削りだしの輪高台	少い	灰白	B - 2	
176	青磁	碗	-	-	5.0	底部	輪は青みがかかった綠色の発色	少い	白	A - 2	
177	常滑製品	變	-	-	-	口縁細片	口縁端部は斜め上方にのびる	並	赤褐	D - 1	
178	常滑製品	變	-	-	-	口縁細片	暗緑色の自然輪を受ける	少い	赤褐	B - 1	
179	常滑製品	變	-	-	-	口縁細片	口縁端部がわずかに下方にのびる	少い	灰褐	A - 2	
180	常滑製品	變	-	-	-	口縁細片	継巻がややくぼむ	多い	赤茶	B - 1	
181	常滑製品	變	-	-	-	口縁部	継巻のくぼみ大	並	灰青	A - 3	
182	常滑製品	變	-	-	-	口縁部	発達した折り返し口巻をもつ	少い	灰青	SD 1	
183	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	継巻と横縞の直行	多い	灰褐	A - 2	
184	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	継巻と横縞の直行	多い	灰褐	E - 4	
185	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	継巻と横縞で構成される格子文	多い	黃灰	B - 2	
186	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	格子文	多い	黃灰	A - 4	
187	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	格子文	少い	黃灰	C - 4	
188	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	格子文	多い	灰褐	A - 2	
189	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	格子文	多い	灰褐	C - 4	
190	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	*状の文様が配される	多い	暗灰	D - 3	
191	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	格子文	多い	暗黃褐	E - 2	
192	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	斜線と長方形の構成文	多い	暗灰	E - 4	
193	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	継縞 横縞 斜線の交錯した文様	多い	暗灰	B - 1	
194	常滑製品	變	-	-	-	南部細片	*状の文様が2列3段で構成される	多い	暗灰	表採	

番号	種類	器種	口径	體高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	輪	社刊号	備考
195	土師質土器	小皿	7.6	1.5	4.1	完全	指押さえ底 内面のナデは「の」の字状	少い		淡黄赤		C-2	
196	土師質土器	小皿	7.1	1.5	4.0	完全	指押さえ底 底部は凹凸状	少い		淡灰白		C-2	
197	土師質土器	小皿	8.4	1.5	5.8	完全	口縁端部の立ち上がり明瞭	少い		淡黄白		B-2	
198	土師質土器	小皿	7.3	1.4	3.5	完全	指押さえ底と爪型圧痕	少い		淡黄白		C-2	
199	土師質土器	小皿	7.1	1.6	4.4	完全	指壓底 内面は滑らかである	少い		淡赤褐		C-2	
200	土師質土器	小皿	8.3	1.8	4.0	完全	指押さえ底と爪型圧痕	少い		淡赤褐		C-2	
201	土師質土器	小皿	7.7	1.6	3.5	完全	指押さえ底と爪型圧痕	並		淡赤褐		C-2	
202	土師質土器	小皿	7.5	1.6	3.0	完全	指壓圧痕	少い		淡黄白		C-2	
203	土師質土器	小皿	7.1	1.6	3.0	完全	指壓圧痕	少い		淡黄白		C-2	
204	土師質土器	小皿	8.4	2.0	4.2	完全	指押さえ底	少い		淡黄白		B-2	
205	土師質土器	小皿	8.0	1.4	5.4	ほぼ完全	外面中央部に押圧によるへこみあり	少い		淡黄白		表採	
206	土師質土器	小皿	8.7	1.7	3.5	ほぼ完全	口縁外側面ナデ調整内外面にすすの付着	少い		淡黄白		B-1	
207	土師質土器	小皿	8.5	1.7	5.2	1/2	口縁内面にナデ調整	少い		淡黄白		A-4	
208	土師質土器	小皿	8.0	1.4	4.5	1/2	指押さえ底	少い		淡赤褐		A-1	
209	土師質土器	小皿	7.6	1.4	3.5	1/2	表裏にすすの付着が部分的に見られる	少い		淡黄白		C-2	
210	土師質土器	小皿	8.0	1.2	2.7	ほぼ完全	指押さえ底	少い		淡灰白		B-1	
211	土師質土器	皿	7.4	1.6	3.8	1/2	指押さえ底口縁内面横ナデ調整	少い		淡黄白		SD 1	
212	土師質土器	皿	7.9	1.6	3.6	1/2	指押さえ底	少い		淡黄白		D-4	
213	土師質土器	皿	7.6	1.5	3.2	1/2	指押さえ底	少い		淡赤褐		C-2	
214	土師質土器	皿	8.8	1.9	4.0	1/2	内面にすすの付着が認められる	少い		淡灰白		B-1	
215	土師質土器	皿	10.0	1.5	5.5	3/5	底盤が極端に厚い	少い		淡黄白		A-2	
216	土師質土器	皿	10.0	1.9	4.6	1/2	底臺中央は外面から押圧され上げ底状	少い		赤褐		B-1	
217	土師質土器	皿	10.0	1.9	4.8	1/2	口縁内部にすす付着	少い		淡赤黄		E-3	
218	土師質土器	皿	9.8	1.4	6.0	1/2	均整のとれた作り	少い		淡黄白		A-2	
219	土師質土器	皿	9.9	1.9	4.0	1/2	口縁内面は横ナデ調整が施される	少い		淡黄赤		C-2	
220	土師質土器	皿	11.0	1.5	6.3	2/3	指押さえ底	並		淡黄褐		E-2	
221	土師質土器	皿	11.1	1.2	7.0	2/3	体部内面に基伏圧痕 底臺中央は押さえにより上げ底状をなす	少い		淡黄白		C-2	
222	土師質土器	皿	12.0	2.1	5.5	ほぼ完全	器形の歪みが生じた椎円形を呈す 片流れ状	少い		淡黄白		C-3	

登録番号	種類	器種	口径	體高	底径	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	種	社別分類	備考
123	土師質土器	皿	10.7	1.9	8.0	3/5	外面に指環压痕	少い		淡灰白		E-2	
124	土師質土器	皿	11.5	1.1	4.8	完形	外面に指環压痕 底部は上げ底状	少い		淡黄白		C-3	
125	土師質土器	皿	11.9	1.3	4.5	4/5	外面に指環压痕	少い		淡黄白		E-2	
126	土師質土器	皿	11.5	1.3	4.5	3/5	口巻端部は内面気味に認められる	少い		淡黄白		A-4	
127	土師質土器	皿	11.1	1.1	3.9	完形	見込みから口巻部内面に横ナデ調整 均整がとれた作り	少い		淡褐		C-2	
128	土師質土器	皿	14.7	2.8	6.2	完形	口巻部内外面に横ナデ調整	少い		淡赤黄		E-2	
登録番号	種類	器種	長さ	幅	厚さ	残存部	器形・技法上の特色	胎土	輪	胎土	種	社別分類	備考
139	土鍋		4.7	1.9	10.1	完形		多い		黄灰		C-4	
140	土鍋		5.2	2.0	17.1	完形		多い		灰褐		C-1	
141	土鍋		5.1	2.1	11.1	完形		多い		黄灰		C-1	
142	土鍋		4.4	1.5	11.1	完形		多い		黄灰		C-1	
143	土鍋		5.1	1.4	11.9	完形		多い		黄灰		B-1	
144	土鍋		5.0	1.9	8.6	2/3		多い		黄白		表探	
145	土鍋		4.4	1.3	23.4	完形		多い		黄褐		D-3	
146	土鍋		3.8	1.1	21.4	完形		多い		黄褐		C-3	
147	土鍋		4.2	1.1	21.7	完形		多い		黄褐		B-2	
148	土製紡錘車		1.4	4.1	74.5	完形		多い		黄褐		E-4	
149	縁胎陶器	小壺	-	-	-	細片	胎は淡い薄黄緑を呈す	少い		淡灰白		D-3	
150	土鉢		-	-	-	細片		少い		黄灰		B-2	
141	土鉢	玉	-	-	-	完形		少い		黄白		表探	
142	圓底土器		-	-	-	底部先端		少い		赤褐		B-3	
143	圓底土器		-	-	-	底部先端	表面は2次焼成を受ける	少い		赤褐		B-2	
144	圓底土器		-	-	-	底部先端	火熱のためか器壁の劣化が激しい	少い		赤褐		B-2	
145	吉鏡		-	-	-	完形	生家遺宝 初鋤年は1019年					B-2	

図版1



作業風景



C 2区土器甕出土状況



C 3区土器高杯・壺出土状況



C 1区土器甕出土状況



SK 1



SE 1埋土堆積状況

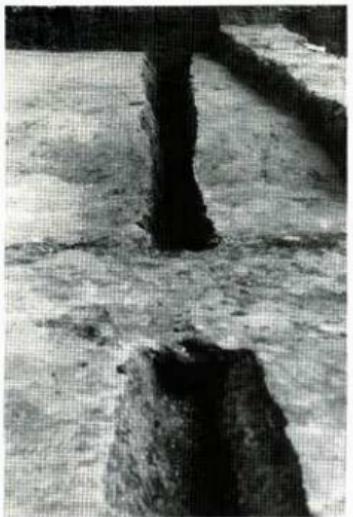


SE 2埋土堆積状況

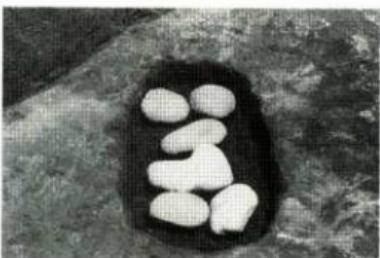


SE 2

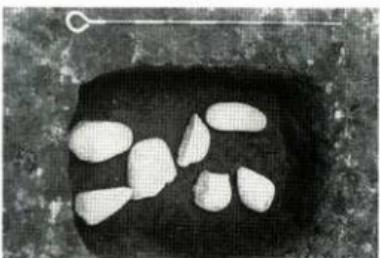
図版 2



SD 1



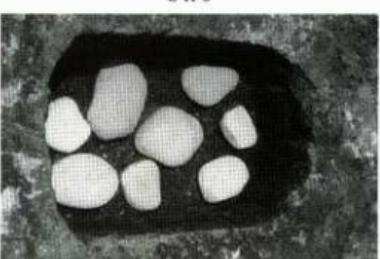
SK 2



SK 3



SD 2

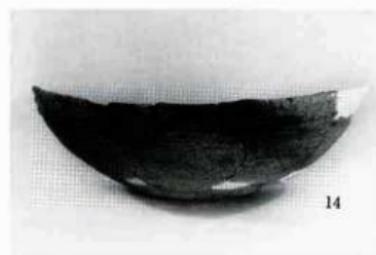
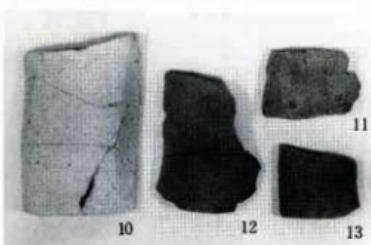
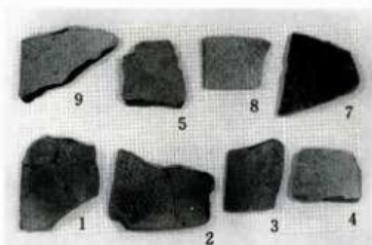


SK 4

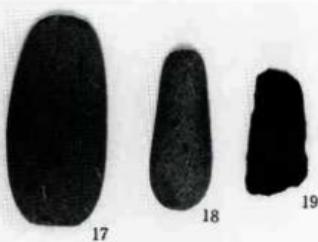


遺構検出状況

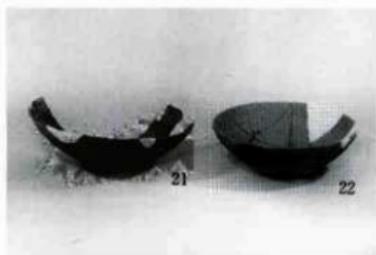
図版 3



14



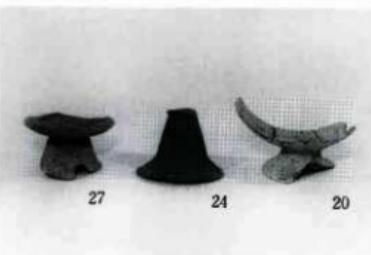
17



21



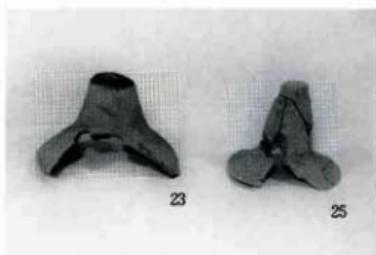
22



27

24

20



23



25

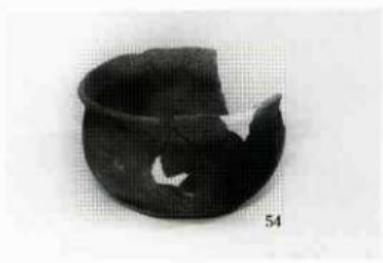
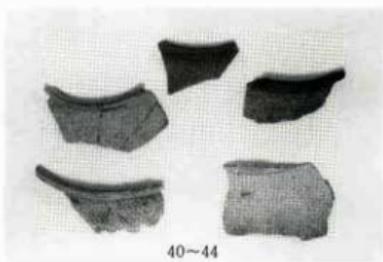
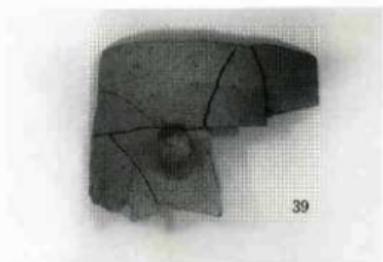
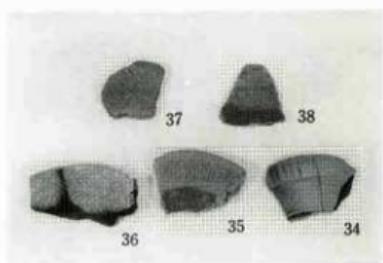
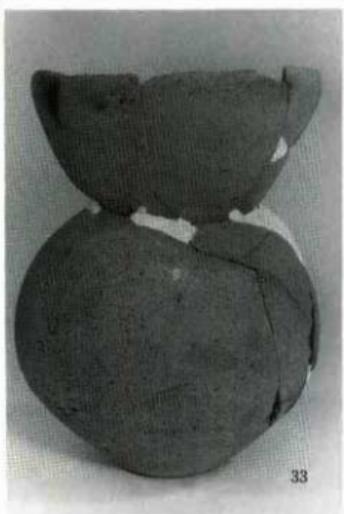


30

29

31

32

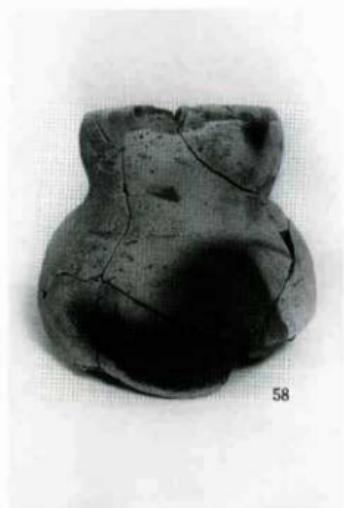
図版
4



56



57

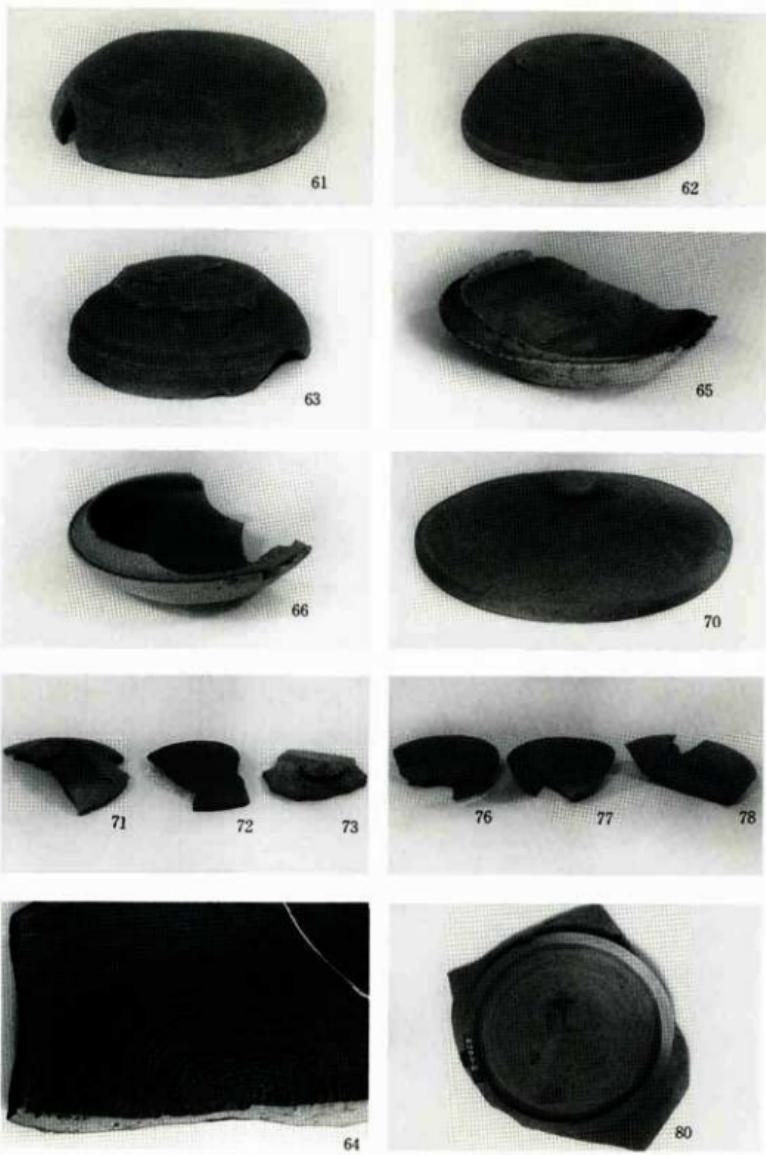


58



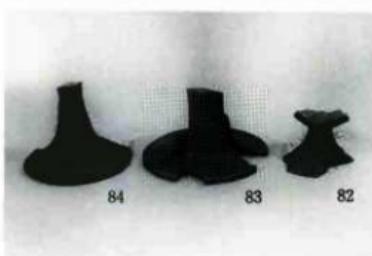
59

圖版 6





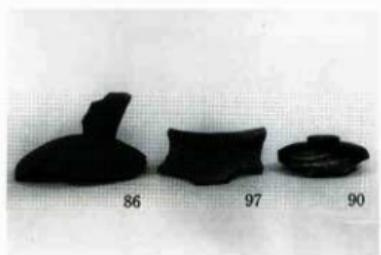
81



84

83

82



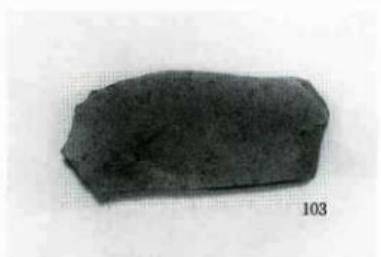
86

97

90



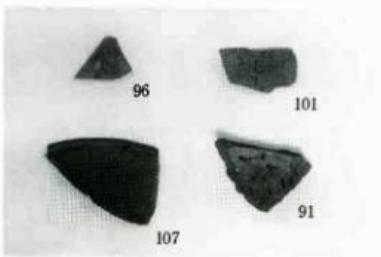
102



103



105



96

101

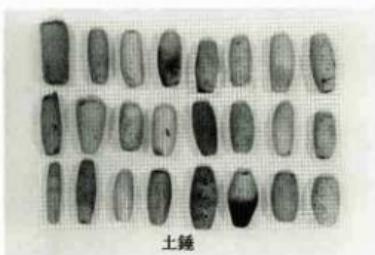
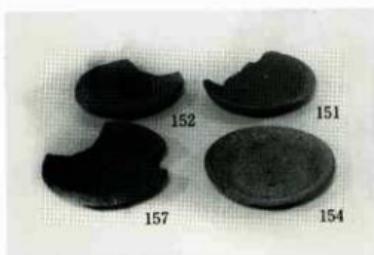
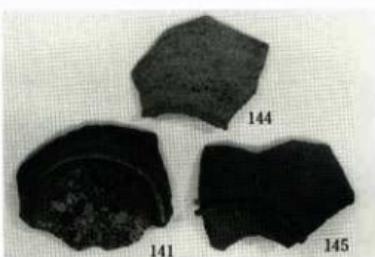
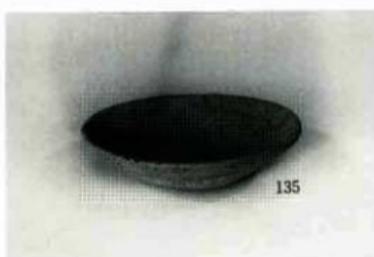
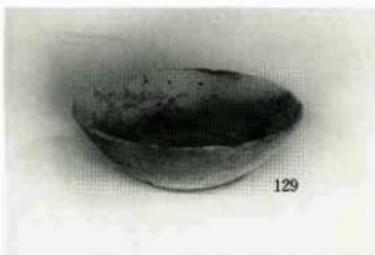
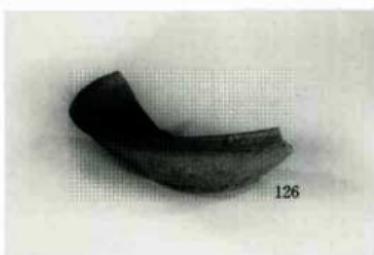
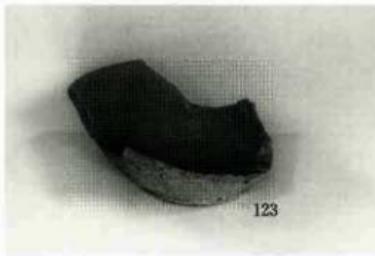
91

107

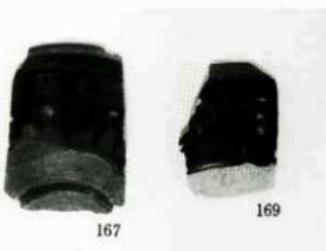


121

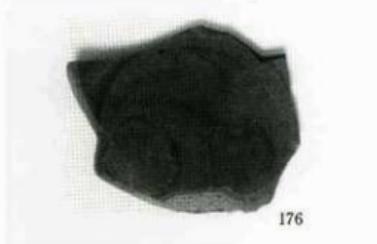
圖版 8



圖版 9



169



岐阜県文化財保護センター調査報告書 第3集

城之内遺跡 II

1992年3月25日 印刷

1992年3月31日 刊行

編集・発行 岐阜県本巣郡聴積町牛牧宮下 395

財團法人 岐阜県文化財保護センター
印 刷 共和印刷株式会社

「城之内遺跡Ⅱ発掘調査報告書」正誤表
第4章 遺 物

頁	行	誤	正
24	30	制作過程	製作過程
25	12	土製紡_車	土製紡錘車